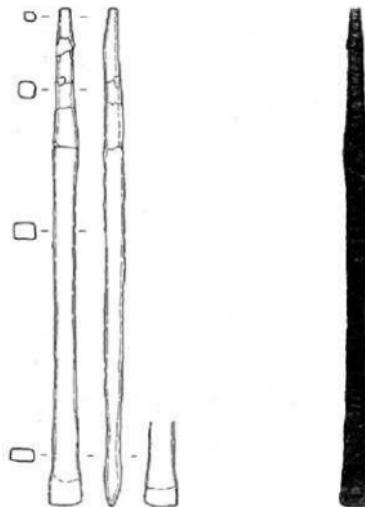


# 比 恵 32

—比恵遺跡群第76次・第77次調査報告—



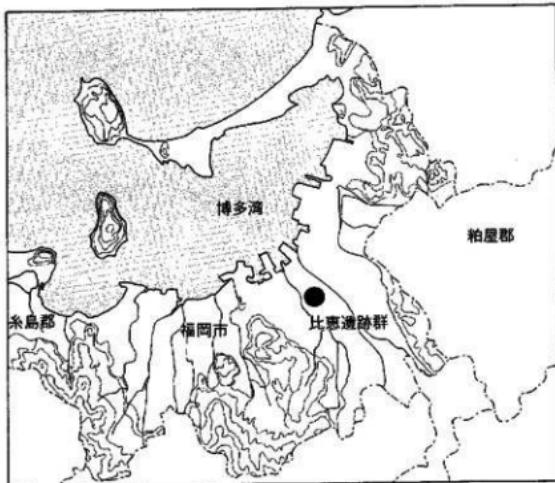
2003

福岡市教育委員会



H I            E  
**比 恵 32**

—ひえいせきぐん 第76次・第77次調査報告—



遺 跡 名	遺 蹤 略 号	調 査 番 号
比恵遺跡群第76次	HIE-76	0127
比恵遺跡群第77次	HIE-77	0135

2003

福岡市教育委員会



## 序

福岡市は古くより大陸との対外交流の場として栄え、その結果大陸よりもたらされた数多くの文化財が今なお地下に眠っています。なかでも、福岡平野の中央部に位置する比恵遺跡群は弥生時代の代表的な遺跡で、発掘によって現れる様々な文物は、かつての奴国の繁栄を今に彷彿とさせてくれます。

福岡市教育委員会では、この比恵遺跡群を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。本書におさめた比恵遺跡群第76次・第77次発掘調査は、共同住宅建設にともない実施したもので、弥生時代から古墳時代にわたる集落を確認し、朝鮮半島からの輸入品とみられる鉄製品などを発見することができました。

調査に際し、日下部ヨシエ様、岩瀬文雄様をはじめ、地元の皆様には快くご理解とご協力を頂き、調査を円滑に進めることができましたことをお礼申し上げます。

調査に関わられた全ての方々に対し、深く感謝申し上げますとともに、この報告書が地域の皆様に幅広く活用され、文化財保護のご理解を深める一助とならんことを願います。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 生田征生

## 例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成13年10月1日から29日に行った博多区博多駅南6丁目64-1所在の比恵遺跡群第76次発掘調査、及び平成13年11月12日から12月10日に行った博多区博多駅南4丁目132所在の比恵遺跡群第77次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査はいずれも共同住宅建設に伴う事前調査として実施した。
3. 検出遺構は調査ごとにその性格の如何によらず発見順に3桁の連番号を与えた。本書ではこの番号の頭に遺構の種別を付記し、例「土坑000」と表記する。
4. 本書に使用した遺構・遺物実測図の作製、写真の撮影は、吉武学が行った。
5. 本書に使用した図の製作は吉武、上塘貴代子、萩尾朱美、森寿恵が行った。
6. 本書に使用した方位は全て磁北である。
7. 本書の執筆と編集は、吉武が行った。
8. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

### 第76次調査

遺跡調査番号	0127		遺跡略号	HIE-76	
調査地地籍	博多区博多駅南6丁目64-1		分布地図番号	37	東光寺 0127
開発面積	361m <sup>2</sup>	調査対象面積	180m <sup>2</sup>	調査面積	110m <sup>2</sup>
調査期間	2001年(平成13年)10月1日~10月29日				

### 第77次調査

遺跡調査番号	0135		遺跡略号	HIE-77	
調査地地籍	博多区博多駅南4丁目132		分布地図番号	37	東光寺 0127
開発面積	419m <sup>2</sup>	調査対象面積	200m <sup>2</sup>	調査面積	262m <sup>2</sup>
調査期間	2001年(平成13年)11月12日~12月10日				

# 本文目次

第一章 はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 遺跡の地理的位置と歴史的環境	2
第二章 第76次調査の記録	
1. 第76次調査地点の位置と周辺調査例	3
2. 第76次調査の概要	5
3. 検出遺構と出土遺物	5
(1)堅穴住居跡	5
(2)土坑	14
(3)掘立柱建物	16
(4)その他の出土遺物	17
4. 小結	17
第三章 第77次調査の記録	
1. 第77次調査地点の位置と周辺調査例	19
2. 第77次調査の概要	21
3. 検出遺構と出土遺物	21
(1)井戸	21
(2)土坑	25
(3)掘立柱建物	31
(4)その他の出土遺物	32
4. 小結	33
第四章 おわりに	34

# 挿図目次

Fig. 1 比恵・那珂遺跡群と調査地点の位置 (1/25,000)

## 第76次調査

Fig. 2 第76次調査地点の位置 (1/1,500)	Fig. 10 堅穴住居跡003実測図 (1/40)
Fig. 3 第76次調査遺構配置図 (1/80)	Fig. 11 堅穴住居跡003出土遺物実測図 (1/3、1/4)
Fig. 4 堅穴住居跡001実測図 (1/40)	Fig. 12 堅穴住居跡004実測図 (1/40)
Fig. 5 堅穴住居跡001出土遺物実測図・I (1/3)	Fig. 13 堅穴住居跡005実測図 (1/40)
Fig. 6 堅穴住居跡001出土遺物実測図・II (1/2)	Fig. 14 堅穴住居跡017実測図 (1/40)
Fig. 7 堅穴住居跡002実測図 (1/40)	Fig. 15 土坑009-011-012-015-016実測図 (1/40)
Fig. 8 堅穴住居跡002出土遺物実測図・I (1/3)	Fig. 16 掘立柱建物019・020実測図 (1/60)
Fig. 9 堅穴住居跡002出土遺物実測図・II (1/3、1/2)	Fig. 17 土坑・掘立柱建物等出土遺物実測図 (1/3)

### 第77次調査

- Fig.18 第77次調査地点の位置 (1/1,500)  
Fig.19 第77次調査遺構配置図 (1/100)  
Fig.20 井戸001実測図 (1/40)  
Fig.21 井戸001出土遺物実測図・I (1/3)  
Fig.22 井戸001出土遺物実測図・II (1/3)  
Fig.23 土坑002・003・004実測図 (1/40)  
Fig.24 土坑002・003・004出土遺物実測図 (1/3)  
Fig.25 土坑005実測図 (1/20)  
Fig.26 土坑005出土遺物実測図 (1/3)  
Fig.27 土坑006～010実測図 (1/40)  
Fig.28 土坑009出土遺物実測図 (1/3)  
Fig.29 掘立柱建物011・012実測図 (1/60)  
Fig.30 掘立柱建物柱穴出土遺物実測図 (1/3)  
Fig.31 その他の出土遺物実測図 (1/3)

Fig.32 第76次調査竪穴住居跡002の類例 (1/100)

## 図版目次

### 第76次調査

- PL. 1 第76次調査区全景 (北東から)  
PL. 2 1. 竪穴住居跡001 (南東から)  
3. 鉄製品の出土状況 (北東から)  
5. 土器の出土状況 (南東から)  
PL. 3 1. 竪穴住居跡002 (北東から)  
3. 竪穴住居跡002 (北西から)  
5. 遺物の出土状況 (西から)  
PL. 4 1. 竪穴住居跡003 (東から)  
3. 竪穴住居跡005 (北東から)  
5. 土坑011 (北西から)  
7. 土坑016 (北東から)  
PL. 5 1. 調査区西端部の段落ち (北から)  
PL. 6 第76次調査出土遺物・II (縮尺不同)  
2. 竪穴住居跡001 (南西から)  
4. 鉄製品の出土状況 (西から)  
2. 竪穴住居跡002 (南西から)  
4. 主柱穴から出土した土器 (北東から)  
2. 竪穴住居跡004 (北東から)  
4. 竪穴住居跡017 (南西から)  
6. 土坑012 (南東から)  
8. 土坑016 (北西から)  
2. 第76次調査出土遺物・I (縮尺不同)

### 第77次調査

- PL. 7 1. 第77次北東側調査区全景 (南西から)  
PL. 8 1. 第77次南西側調査区 (北から)  
PL. 9 1. 井戸001 (北西から)  
PL. 10 1. 土坑002十層断面 (南東から)  
3. 土坑005土器出土状況 (南西から)  
5. 土坑008・010 (南から)  
PL. 11 1. 掘立柱建物011 (南西から)  
PL. 12 第77次調査出土遺物 (縮尺不同)  
2. 第77次南西側調査区全景 (南西から)  
2. 第77次北東側調査区作業風景 (東から)  
2. 井戸001 (南西から)  
2. 土坑002完掘状況 (南東から)  
4. 土坑005土器出土状況 (南東から)  
6. 土坑008・010 (南西から)  
2. 掘立柱建物012 (南西から)

# 第一章 はじめに

## 1. 調査に至る経過

博多区の比恵・那珂遺跡群が弥生時代の集落遺跡として注目されて、すでに半世紀以上が経過した。福岡市教育委員会はこの遺跡を守るために、ビル建築などの開発が予定された場合には事前に試掘調査を行って遺跡の状況を確認するとともに、その保存が困難な際には地権者の協力を得て記録保存のための発掘調査を行っている。

平成13年、福岡市博多区博多駅南6丁目64-1において、日下部ヨシエ氏による共同住宅建設が計画され、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（以下埋文課）に7月31日付けで埋蔵文化財の事前調査願が提出された。申請地は、福岡市文化財分布地図上では比恵遺跡群に含まれ、かつ、周辺の試掘調査あるいは発掘調査でも遺構を確認しており、遺跡の存在する可能性が極めて高いものと考えられた。このため、埋文課では8月23日に試掘調査を実施し、対象範囲に設けた1本のトレンチにより、地表下0.3mで竪穴住居跡、溝、柱穴等の遺構を確認した。試掘の結果を踏まえ、埋文課では施工者と協議を持ったが、予定建築物の構造上、地下の遺跡への破壊は避けがたい状況であり、やむなく記録保存のための緊急発掘調査を実施することになった。発掘調査は平成13年10月1日から10月29日に埋文課が受託事業として実施し、整理報告書作成は平成14年度に行なった。

さらに同年、博多区博多駅南4丁目132番において、岩瀬文雄氏による共同住宅建設が計画され、埋文課に10月2日付けで埋蔵文化財の事前調査願が提出された。申請地は、上記6丁目と同様に地下に遺跡が包蔵されていることが確実視された。このため埋文課は10月11日に試掘調査を実施し、対象範囲に設けた1本のトレンチにより、地表下1.0mで柱穴を確認した。ただし、既存建物の基礎が1.3mの深さに及んでおり、遺構の分布は薄いと予想できた。この結果を踏まえ、埋文課では施工者と協議を持ったが、地下の遺跡への破壊は避けがたく、やむなく記録保存のための緊急発掘調査を実施することになった。発掘調査は平成13年11月12日から12月10日に埋文課が受託事業として実施し、整理報告書作成は平成14年度に行なった。

## 2. 調査の組織

第76次調査・第77次調査とともに以下の組織で行った。調査にあたり、施工業者である上村建設株式会社（第76次）ならびに照栄建設株式会社（第77次）に条件整備等で多人な協力を受けた。また、第76次調査中に出土した鉄製品について埋文課の長家伸から助言を受けた。記して感謝申し上げたい。

**調査委託** 日下部ヨシエ（第76次調査）、岩瀬文雄（第77次調査）

**調査主体** 福岡市教育委員会 教育長 生田征生

**調査総括** 埋蔵文化財課長 山崎純男

埋蔵文化財課調査第2係長 力武卓時（前任）、田中壽夫（現任）

**調査庶務** 文化財整備課 御手洗 清

**調査担当** 埋蔵文化財課事前審査係 大塚紀宣、田上勇一郎（試掘調査及び事前協議担当）

埋蔵文化財課調査第2係 吉武 学（発掘調査担当）

**調査協力** 金子二三枝、川崎 良、木村文子、幸田信乃、清水 明、齒部保寿、塚木よし子、中野祐子、野口ミヨ、山内 恵、山崎光一、渡辺淑子（五十音順・敬称略）

**整理協力** 上嶋貴代子、下山慎子、萩尾朱美、森 寿恵（五十音順・敬称略）

### 3. 遺跡の地理的位置と歴史的環境

比恵遺跡群は、南接する那珂遺跡群とともに東の御笠川と西の那珂川に挟まれた丘陵上に展開する遺跡のひとつである。この丘陵は南の春日丘陵を起点として北北西に伸展するもので、花崗岩風化礫層を基盤とし、阿蘇カルデラ起源の火碎流堆積物である八女粘土層や鳥栖ローム層などを最上部とする。この丘陵は沖積作用により島嶼状に分断され、それぞれの島の上に遺跡が展開するといった状況を呈している。福岡市域に限れば、南から井尻A・B、諸岡A・B、五十川、那珂、比恵遺跡群の展開する丘陵がそれであり、低湿地を挟んで博多遺跡群の立地する砂丘へと至る。そのうちのひとつである比恵遺跡群の立地する丘陵は、かつては沖積作用による細かい谷が複雑に入り込む丘陵であったと推定されるが、1930年代の耕地整理と以後の都市開発によって平坦にされ、現況ではそのような景観を窺うべくもない。第76次調査地点は丘陵本体から北東へと伸びる枝丘陵の東斜面、第77次調査地点は丘陵に北側から深く食い込んだ低地に相当する部分に位置しているものと考えられる。

いわば丘陵のヘリともいえる部分に立地する今回の両調査では、主に弥生時代中期～古墳時代初頭の集落遺構を検出した。この時期、比恵遺跡群では丘陵全域に集落が拡大する時期にあたり、丘陵の縁辺部にまで開発の手が及んだことを示すものと言えよう。この時期に丘陵上に展開する主な遺構には、丘陵上を区切る直線的な溝、地形と無関係にほぼ同じ方向を向けて営まれる竪穴住居跡や小形掘立柱建物、一般の住居、工房、特殊な掘立柱建物などがあり、遅れて丘陵上を南北に伸びる延長1500mを超える道路の出現も指摘されるなど、個々のムラの集合体ではなく、遺跡群全体が一つの単元として大規模な集落を形成していた状況が想定されている。

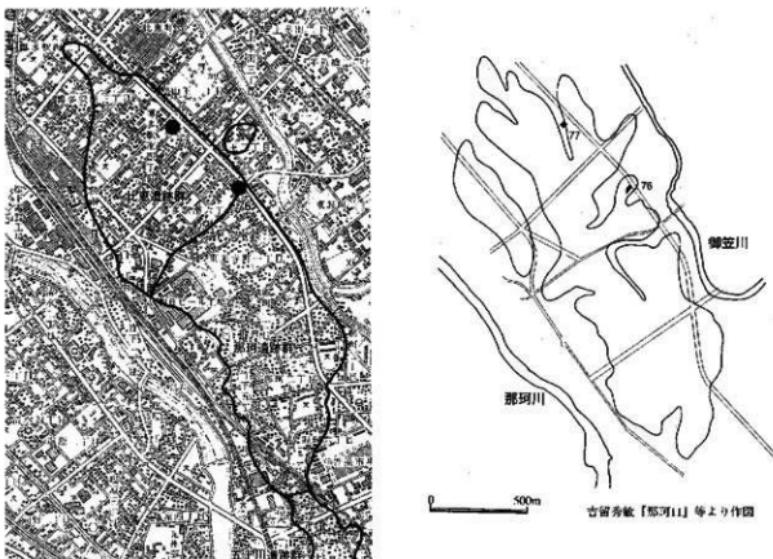


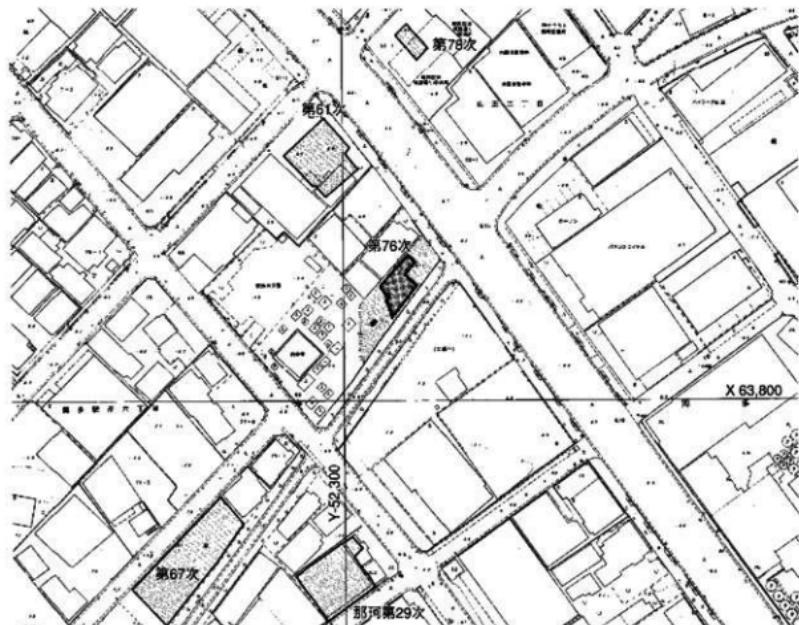
Fig. 1 比恵・那珂遺跡群と調査地点の位置 (1/25,000)

## 第二章 第76次調査の記録

### 1. 第76次調査地点の位置と周辺調査例

第76次調査地点は比恵・那珂遺跡群がのる洪積丘陵の東端部に位置し、両遺跡群の境目付近にあたる。調査前は駐車場で、地表面の標高は海拔6.9mを測る。遺構面の標高は6.6mであるが、これは1930年代の区画整理により地形が著しく削られた結果であり、検出した遺構の残り具合からみて、0.5~1m程の削平を受けたものと考えられる。また、丘陵が東へ下っていく斜面に立地しており、西側の遺構は特に残りが悪い。更に、西端は近世に1m近い下げが行われている。

周辺には北側に第61次調査地点、南西に第67次調査地点がある。第61次調査は平成9年3月3日~24日にビル予定地273m<sup>2</sup>に対して実施した。調査番号9673。遺構の残りは悪く、弥生時代後期~古墳時代前期の井戸等の深い遺構のみを確認した。竪穴住居跡等の生活遺構は削平消滅した可能性が強い。標高は地表面が6.8m、遺構検出面が5.2~6mで、第76次と比較すると強い削平を受けていることが分かる。(比恵遺跡群26 福岡市埋蔵文化財調査報告書第562集 1998 福岡市教育委員会) 第67次調査は平成11年5月12日~6月14日に共同住宅によって破壊される約200m<sup>2</sup>に対して実施した。調査番号9907。調査区の西半分は中世以前に大きく削られていたが、古代の竪穴住居跡・掘立柱建物・溝等を検出したほか、古墳時代の遺構も認められる。立地からみて、集落の縁辺部と考えられる。(福岡市埋蔵文化財年報Vol.14 2001 福岡市教育委員会)



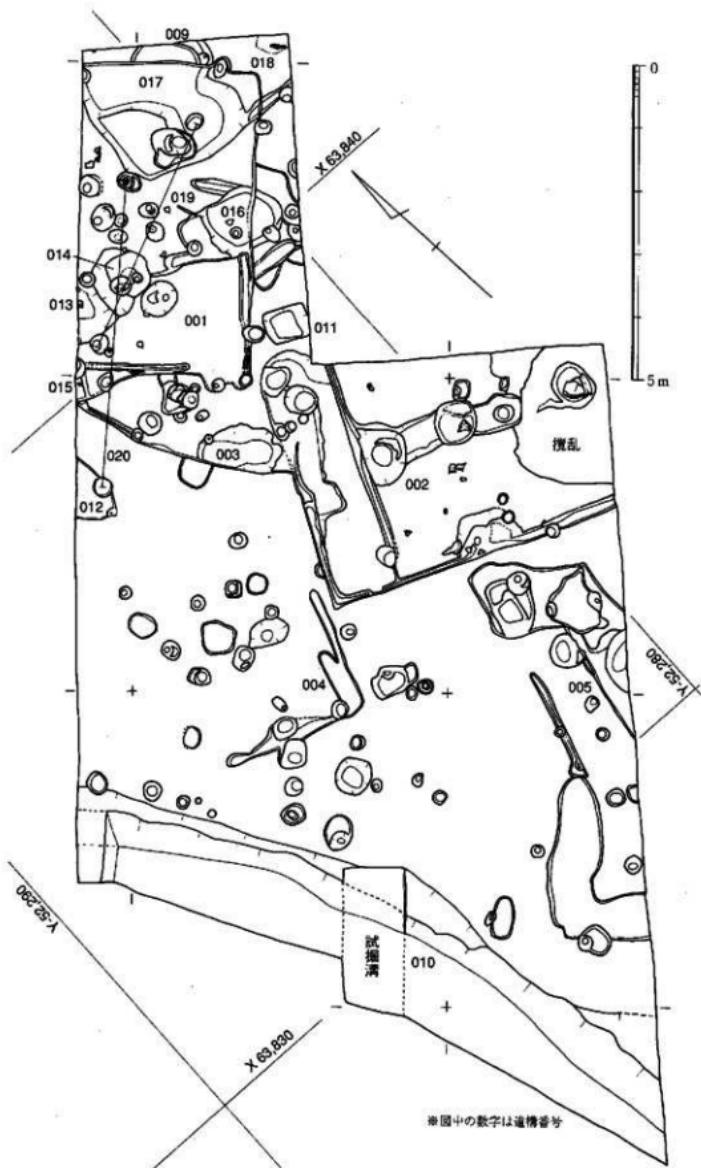


Fig. 3 第76次調査遺構配置図 (1/80)

## 2. 第76次調査の概要

地表から遺構面までの深さは30cmを測り、基盤土は鳥柄ローム上部の暗褐色粘土で強い削平を受けている。表土は造成土で、砂利とその下層の貝殻層（排水のために入れられたものか）からなり、遺構面にこれらが食い込む部分や重機の爪痕が見られる。検出した遺構は、弥生時代中期～古墳時代初期の竪穴住居跡6軒、土坑6基、中世の掘立柱建物2棟、及び弥生時代～中世の柱穴少數である。遺構は調査区のはば全域に分布しており、遺構の密度は比較的濃いと言えるが残りは悪く、竪穴住居跡の平面プランを把握できたものは2軒に過ぎない。基盤土が落ちていく東側では比較的遺構の残りが良いが、最も深い竪穴住居跡002でも検出面から床面まで15cmを残すに過ぎない。また、西端部は90cmの段差をもって急激に落ち、底面には畑の耕作土を思わせる暗褐色土が堆積し、染付片が出土した。この段差以西は調査対象外としたが、重機で埋め戻す際に一部にトレーニング（Fig.2参照）を入れた結果、やはり同様の状況が続いている。今回の調査範囲ではその性格を明らかにしがたい。ただし、南西に80m離れた第67次調査地点までは伸びていないようなので、この間で立ち上がるのであろう。以上の遺構からは、弥生土器、土師器、須恵器などの他、「ノミ」状鉄製品が出土した。

調査区は筑紫通りに面し、北東～南西に長い区画をなしているため、遺構実測の基準線は調査区の形状に合わせて任意に設定した。その後『博多区・南区内（那珂～井尻地区）遺跡基準点測量委託 四級基準点測量成果簿（平成6年2月）』の成果を利用して国土座標（第II系）上に位置づけた。標高もこれによる。

## 3. 検出遺構と出土遺物

### （1）竪穴住居跡

#### 竪穴住居跡001 Fig.4、PL.2

調査区の北東端に位置する。全体の約1/2を検出し、残りは調査区外に伸びる。古代～中世のピット多数に切られ、竪穴住居跡017を切っている。平面プランは方形で、調査区内で500cm×280cmを確認した。検出面から床面までの深さは10cmを測り、覆土は黒褐色粘質土で自然に埋没している。床面の南～西の腰際に幅6～15cm、深さ5cm前後の浅い溝があるが、東側にはない。主柱穴は134、135で、心々距離で250cmを測るが、北側調査区外にもう一對あって4本柱になるものであろう。主柱穴はいずれも不整な格円形プランを呈し、134は径65～75cm、深さ85cm、135は径51～62cm、深さ80cmで、ともに掘り方中位に段を持ち、柱痕跡は確認できない。竪穴住居跡017と重なり合う東側部分は床を貼っていたと思われるが、他に貼床はない。ベッド状遺構、焼土、炭化物は認められない。床面で土坑013・014を検出したが、他の住居跡に伴う遺構の可能性もある。遺物は古式土師器を中心にコンテナ3箱分が出土したが、住居跡が浅いため大半が床面直上の出土といってよい。特筆すべき遺物に「ノミ」状鉄製品がある。刃先を北に向ける、床面からやや浮いた状態で出土した。このため、この場で鉄製品の加工を行っていた可能性があるとみて住居跡覆土の一部を水洗したが、鉄片1点を得たのみである。

#### 竪穴住居跡001出土遺物 Fig.5～6、PL.5～6

1は弥生時代中期の壺の口縁部で、竪穴住居跡017に伴うものであろう。2も同じく壺である。3～9は古式土師器である。3は二重口縁壺で、口縁部を欠くため法量と傾きは不正確である。岡上の胴部最大径はやや下位にあり24.7cm。内外とも器面の残りが悪いが、外面は刷毛目調整の痕跡を留め、口縁は横ナデする。内面は下から刷毛目、ヘラ削りの順で調整を加え、肩部内面に指頭痕を残す。胎

上に砂粒を多く含み、焼成は不良である。4は長頸壺で、口縁を欠き、底部は接合部から剥がれる。二次加熱を受け、胴中位下半は内外とも器壁がひび割れる。内外とも刷毛目調整後にナデ調整を加えるが、特に外面はナデが丁寧である。胎土に石英と雲母微粒子を含むが概ね精良で、焼成は良好。胴部最大径15.1cm。5～9は高壺で、全て脚を壺底に差し込み接合する。5は壺底と脚外面をヘラナデ、壺外面をナデ調整し、脚内面にはシボリ痕がある。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。6は脚据部の三方に上方から円形の透孔を穿つ。脚内面は時計回りのヘラ削りで、屈曲部はナデ調整するが、他は器面が剥落して調整不明。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。7は脚内面に時計回りのヘラ削りがあるが、他は器面が剥落して調整は不明。胎土に大きな砂粒を微量、細かい砂粒を多量に含み、焼成は良好。8は脚内面を時計回りにヘラ削りの後、下半をヘラナデ調整する。胎土に砂粒を少量含み、焼

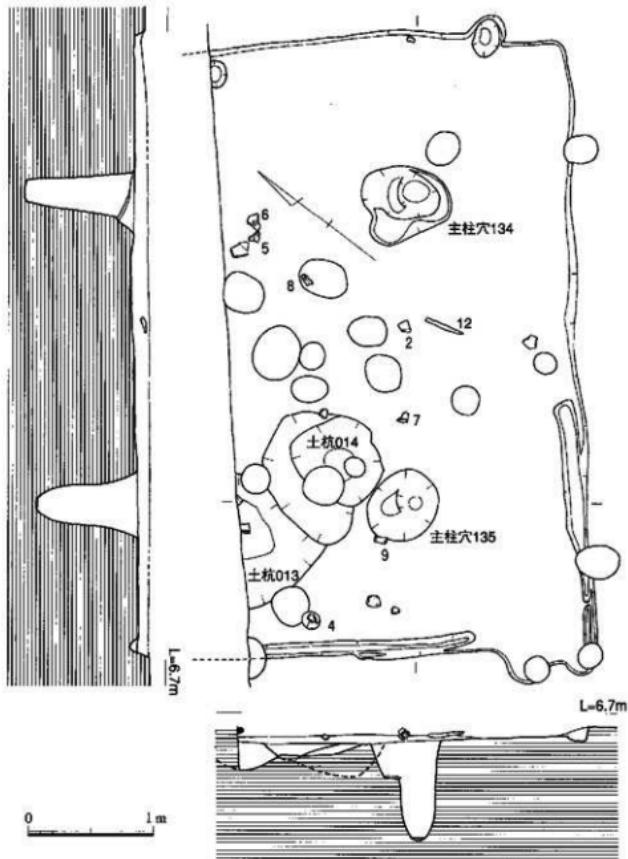


Fig.4 積穴住居跡001実測図 (1/40)

※図中の数字は遺物番号

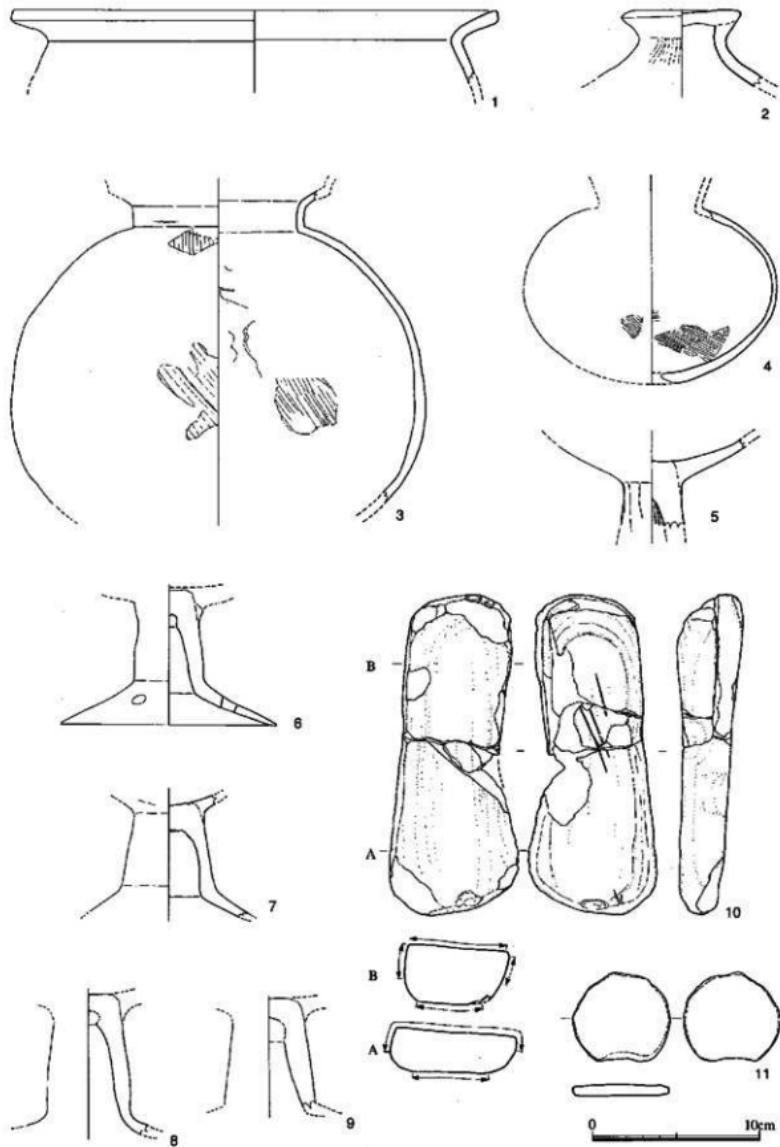


Fig.5 壁穴住居跡001出土遺物実測図・I (1/3)

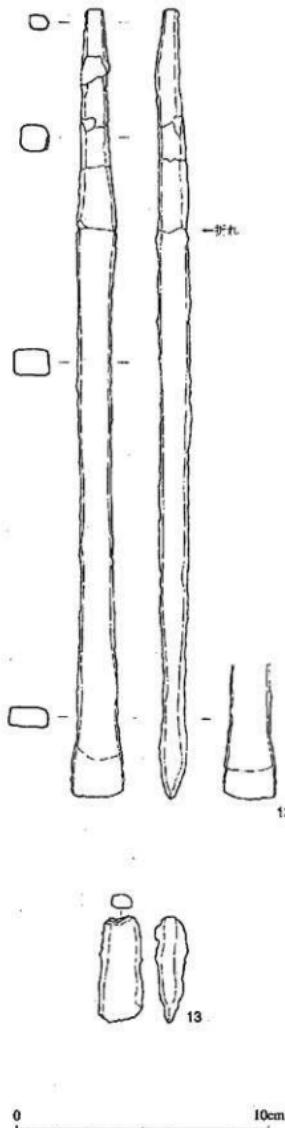


Fig. 6 壁穴住居跡001  
出土遺物実測図・II (1/2)

成は良好。9は器面剥落のため調整は不明。胎土に微砂粒と雲母粒を少量含むが精良で、焼成は良好。

10は砥石である。石材は節理の入る砂岩で脆く、調査時に割れた。図左面の平坦面を主要な作業面として使用するが、他の3側面も研磨痕を有する。図右面に刃先で付けたような条痕が3条ある。出土位置を示していないが、「ノミ」状鉄製品の近くのほぼ同レベルから出土した。11は土器片に手を加えた土器製品で、表裏平坦面は磨滅しているが、周縁部には意図的に擦った痕跡が残る。

12は「ノミ」状鉄製品である。図及び写真は保存処理後のものである。出土時は錆化により膨れ、二つに折れた状態にあった。折れた部分から上が柄部であろう。体部は断面方形で、刃先はやや開き、片刃である。基部は尖り気味で上端に小さい平坦面がある。基部端は処理時の接合により少し曲がる。側面を見ると縱方向のクラック数本が認められ、鍛造時の折り返しを示すものかもしれない。メタル反応があるが、都合により今回の報告までに科学分析を経ていないので他日を期したい。全長31.5cm、刃部幅2.0cmを測る。13は住居跡の排水を水洗した際に出土した鉄片である。上部は棒状、下部は板状を呈する。メタル反応はない。

出土した古式土師器より、遺構の時期は古墳時代初頭の布留式古段階に位置づけられる。

#### 壁穴住居跡002 Fig. 7、PL. 3

壁穴住居跡001の南に接して位置する。一部が調査区外に伸び、東側は搅乱に大きく破壊されているが、長方形プランを呈し両短辺側にベッド状遺構を持つ2本柱の壁穴住居跡と考えられる。現況で短辺413cm、長辺535cmで復原すれば長辺は620cmとなる。遺構検出面から床面までの深さは15cmを残すが、ベッド状遺構は検出時に床面が露呈しており、北側はプランが一部明瞭でない。覆土は黒褐色粘質土で、自然に埋没した状況である。床面の西短辺側にベッド状遺構があり、幅100cm、床面との比高差15cmである。ベッド状遺構は地山削り出しで、一部薄く床を貼る。住居跡の壁際には溝が巡り、ベッド状遺構との境にも溝を設ける。溝は幅10~23cm、深さ10~25cmで、南側が特に広く深い。床面中央には地床炉があり、炭化物・焼上を含む黒褐色粘質土が詰まっていた。炉は径70cmの円形プランをなし、深さ18cmで北東側にやや浅い。他に焼上面、炭化物は認められない。主柱穴は124、125で、124はやや離れた位置にあり、炉跡との心々距離は124が200cm、125が125cmを測る。いずれも梢円形プランを呈し、124は径58~75cm、深さ30cm、125は径67~98cm、深さ54cmである。

柱痕跡は確認できないが、124ではやや浮いた位置から壺形土器が出土し、柱抜き跡に投棄したものと思われる。主柱穴の間には幅約50cmの溝が掘られており、溝は125に向かって深く、最深部で35cmを測る。この溝は貼床上面で検出され、炉跡と主柱穴はこの溝を埋めた後に設けられている。住居の南辺中央には椿円形プランの土坑があり、規模は長径110cm、短径64cm、床面からの深さ18cmである。出入りに関わる施設であろう。ベッドを除く床面全体に厚めの貼床があり、地山土である灯褐色粘質土と黒褐色粘質土を混ぜた土で、5~15cmの厚さに設ける。床面は炉跡周辺を中心に固く締まり、炉より北側の床面は南より5cmほど高い。貼床下には住居掘削時に生じたとみられる隔丸方形の深い探しがある。遺物は弥生時代終末の土器を中心にコンテナ4箱分が出土した。特筆すべき遺物に半島系の軟質土器、鉄片がある。

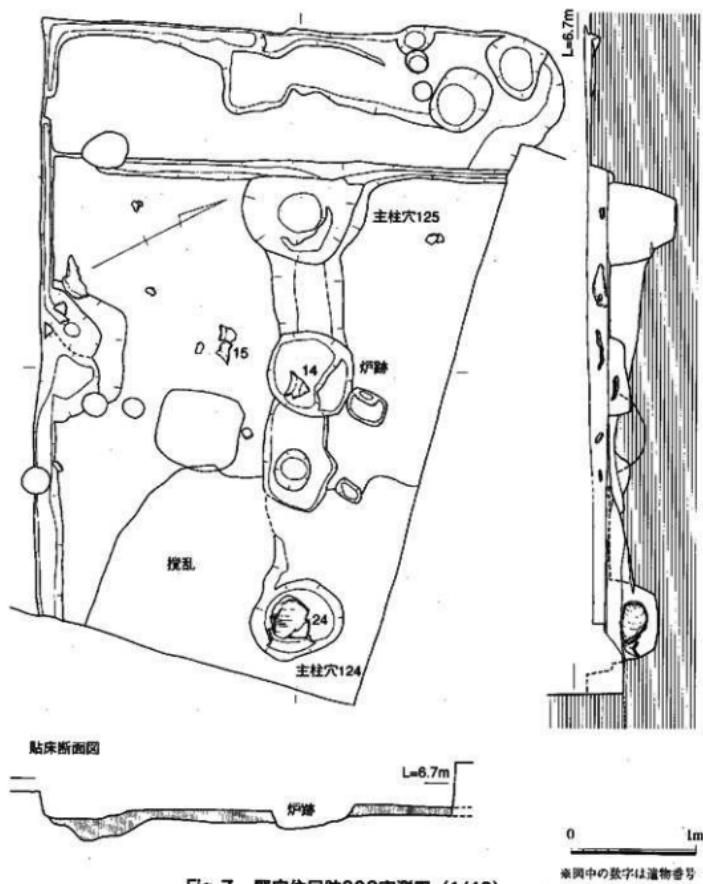


Fig. 7 壁穴住居跡002実測図 (1/40)

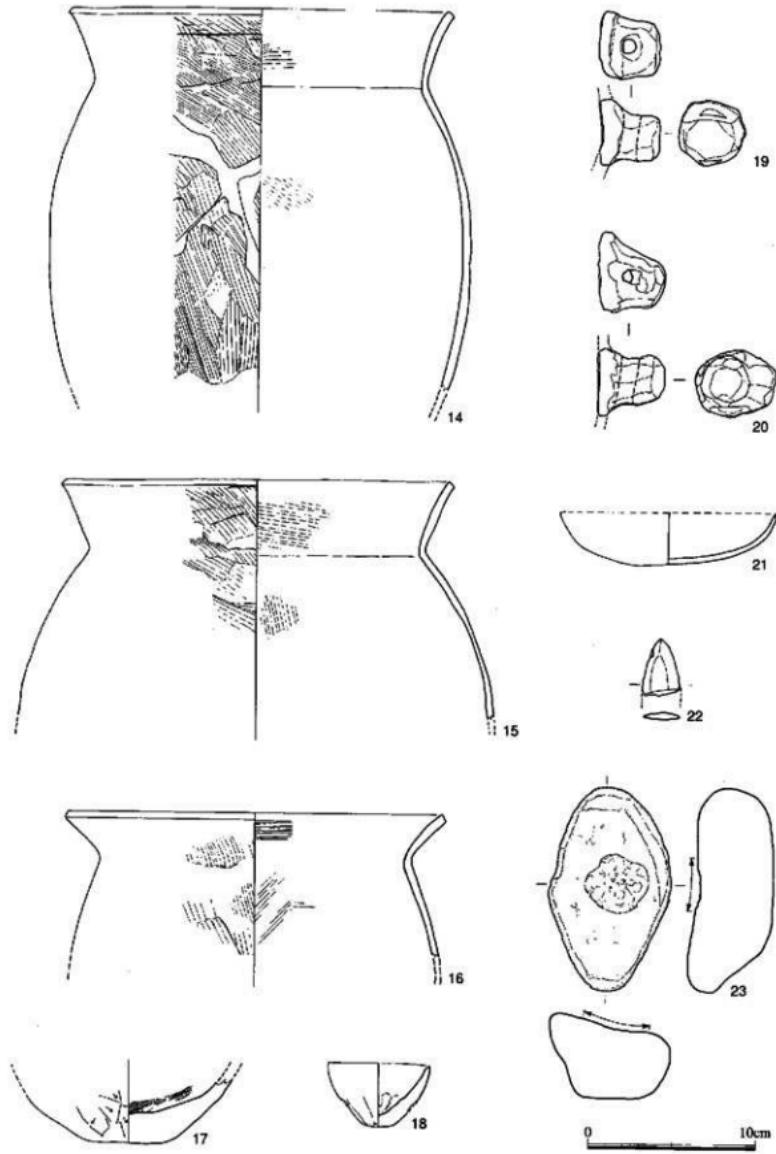


Fig. 8 整穴住居跡002出土遺物実測図・I (1/3)

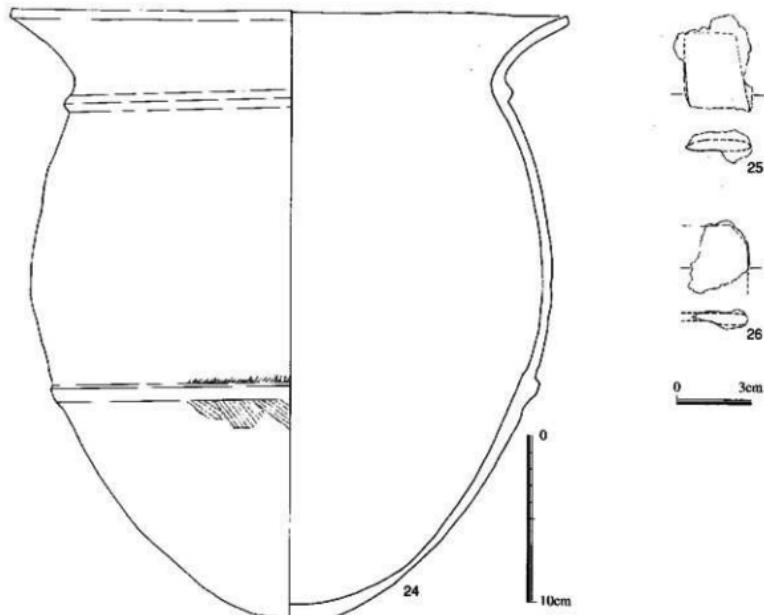


Fig. 9 積穴住居跡002出土遺物実測図・II (1/3、1/2)

積穴住居跡002出土遺物 Fig. 8 ~ 9、PL. 6

14~16は壺である。14は頸部で屈曲し口縁が外反して開き、端部を面取りする。胴部は張りが少くなくで肩である。外面を刷毛目調整し、口縁部を横ナデする。胴部内面は刷毛目をナデ消している。胎土には砂粒とカクセン石を少量含み、焼成は良好。口縁部内面に黒斑がある。口径22.9cm。か跡の覆土から出土した。15はやや胴が張り、口唇部は面取りされて外方へ粘土がはみ出す。外面を刷毛目調整し、胴部内面にはナデ調整を加える。多量の砂粒と微量の糞は、カクセン石を含み、焼成は良好。口径23.4cm。16は頸部が丸く屈曲して口が開き、端部を面取りする。外面を刷毛目調整の後、頸部外面と口縁部外面を横ナデ調整する。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。外面の一部に黒斑がある。17は壺または壺の底部片で、不安定な半底である。内面は粗い刷毛目調整、外面はヘラ削りである。砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。18は手捏ねのミニチュア土器で、器両が著しく剥げ落ち、風化のため脆い。胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良。19・20は半島系軟質土器の外耳である。いずれも土師質で、ヘラにより整形し面取りする。尖孔は19が両側から、20は下方より粗雑に行う。ともに胎土には砂粒を含むものの、在来土器の胎土と大差はない。淡茶褐色を呈し、焼成は良好。21は鉢で、口縁端部を少し欠くがほぼ完存する。器面は荒れて調整不明。24は大ぶりの壺で、主柱穴124に投棄されたものである。攪乱坑のため1/2を失うが、本来は完品だった可能性がある。頸部は丸く屈曲し、口縁は外反して端部に面を取る。最大径は胴中位にあり、底部は平底の痕跡を僅かに留める。頸部に三角突帯、胴部下位に低い台形突帯を貼り付ける。器面が荒れて調整は明らかでないが、台形突帯の上下には刷毛目が残る。表裏とも胴部中位で色調が変わり、上半は褐

色、下半は黄褐色を呈する。調整や焼成に起因するものではなく、土器製作の途中で素地土を変えたものであろう。焼成は一部不良で、口縁内面と底部外面に黒斑がある。口径33.3cm。

22は安山岩製の磨製石鎌の先端部で、表面は風化している。23は凹石で、一側面のみを使用する。玄武岩製。25・26は鉄製品である。とともに端部を折り曲げた手鎌のように見えなくもないが、透過X線写真撮影によっても確証を得ることができなかったので鉄片としておく。メタル反応はない。

以上の遺物は、弥生時代後期末に置くことができる。

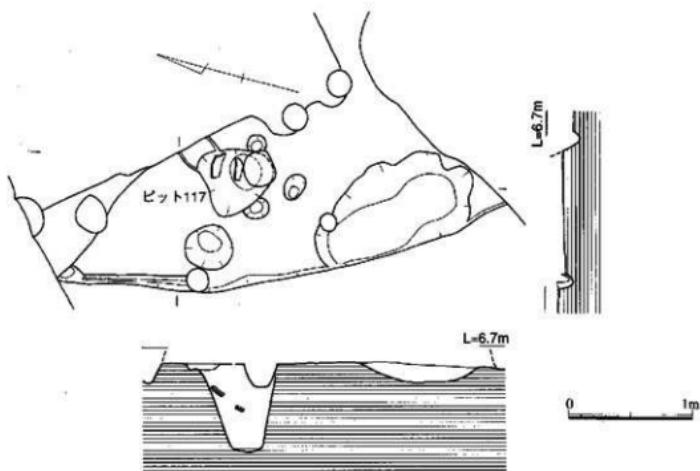


Fig.10 積穴住居跡003実測図 (1/40)

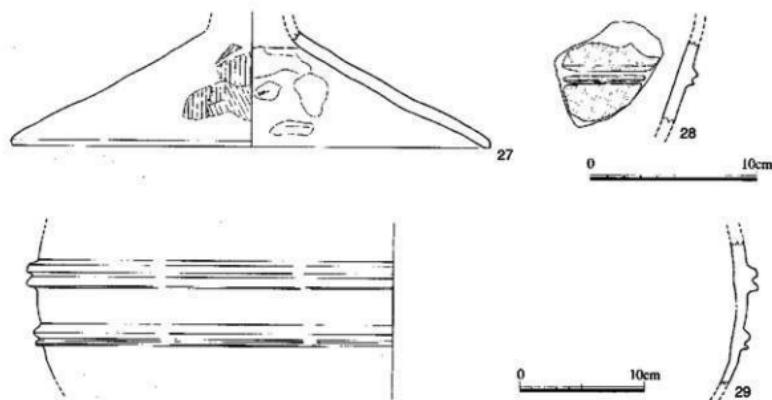


Fig.11 積穴住居跡003出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

#### 豊穴住居跡003 Fig.10、PL.4

豊穴住居跡001と002の間の僅かな空間にその一部を確認した。東側へ内湾する段落ち沿いに一部壁溝が巡るようにも見え、円形住居跡の可能性がある。仮に円形住居として復原した場合、直径11.4mの大型住居となるが、ほとんど床面まで削平されているため確証はない。周辺の土坑・ピットとその出土遺物を同じ図上に示したが、相互の関連については詳らかでない。上坑は梢円形プランで長径136cm、短径75cm、深さ15cmを測る。ピット117は不整な円形プランで径53~60cm、深さ70cmである。底面から浮いた状態で大きめの土器片（Fig.11-27・29）が出土した。

#### 豊穴住居跡003出土遺物 Fig.11

27~29は弥生時代中期の土器で、いずれもピット117から出土した。27は蓋であろう。内面の指頭痕、外面の刷毛目をいずれもナデ消し、端部は横ナデする。胎土に砂粒と雲母粒を含むが精良で、焼成は良好。28は丹塗り壺の胴部片で、突帯が2条巡る。内面ナデ、外表面横ナデの後丹塗りを施す。胎土は精良で焼成は不良。29は大型壺の胴部片で、二条突帯を2重に回す。内面ナデ、外表面横ナデ調整で、胎土に砂粒を含み、焼成不良。胴部最大径は56cm前後となろう。

#### 豊穴住居跡004 Fig.12、PL.4

豊穴住居跡002の西側でその一部を確認した。小規模の溝がし字形に巡っており、豊穴住居跡コーナー部の壁溝の可能性がある。溝

の幅は7~36cm、深さは5cmに溝たない。図中にアミで示したピットには焼土が認められ、炉跡の可能性がある。炉跡は不整な円形プランを呈し、径52~56cm、深さ4cm。この炉跡を挟んで二つのピットがあるが、溝とは主軸方向を異にする。ピットは137が梢円形プランで径27~30cm、深さ42cm、140が不整な梢円形プランで径40~70cm、深さ44cm。溝からは遺物が出土せず、時期は不明である。

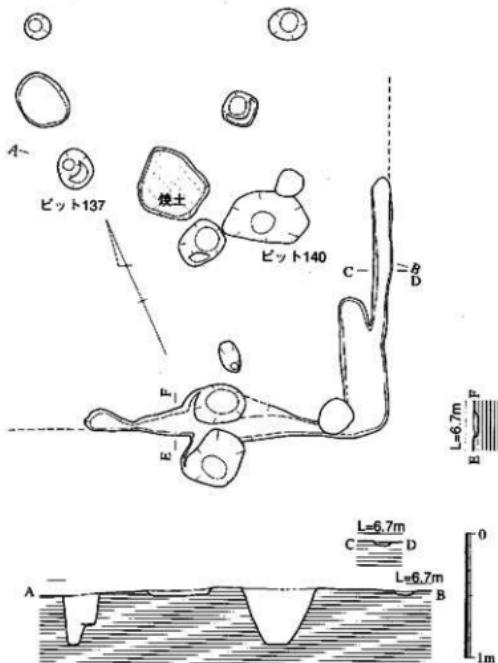


Fig.12 豊穴住居跡004実測図 (1/40)

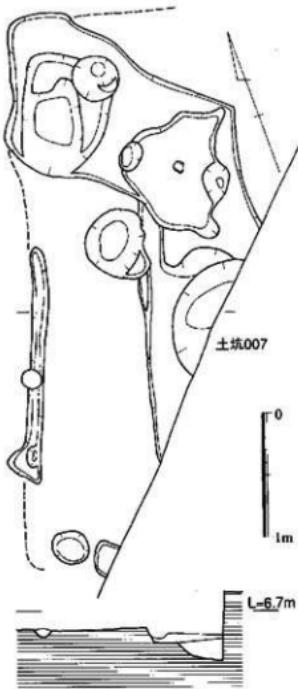


Fig.13 壁穴住居跡005実測図 (1/40)  
壁穴住居跡001の東側に位置するが、調査区内では大半が001と重なっており、001の床面でプランを確認した。平面プランは方形とみられるが規模等は不明である。検出面から床面までの深さは15cm程度を残す。南辺の一部には幅15~20cm、深さ10cm強の壁溝が巡る。001と重なる部分の床面には凹凸が見られるが、調査時に貼床を飛ばした可能性がある。遺構検出当初は壁穴住居跡と分からず、土坑008・018の番号で遺物の一部を取り上げた。弥生時代中期の土器が少量出土したが、図示できるものはない。

11cmである。北側には浅い窪みがいくつかあるが、貼床下の窪みと考えることができよう。遺構の覆土は全て黒褐色粘質上で、弥生土器と古式上部器の小片が出土したが、図示できるものはない。

#### 壁穴住居跡017 Fig.14, PL. 4

壁穴住居跡001の東側に位置するが、調査区内では大半が001と重なっており、001の床面でプランを確認した。平面プランは方形とみられるが規模等は不明である。検出面から床面までの深さは15cm程度を残す。南辺の一部には幅15~20cm、深さ10cm強の壁溝が巡る。001と重なる部分の床面には凹凸が見られるが、調査時に貼床を飛ばした可能性がある。遺構検出当初は壁穴住居跡と分からず、土坑008・018の番号で遺物の一部を取り上げた。弥生時代中期の土器が少量出土したが、図示できるものはない。壁穴住居跡001貼床出土で取り上げたFig.5-1の弥生時代中期の上器がこの住居に伴う可能性がある。

#### (2) 土坑

##### 土坑009 Fig.15

壁穴住居跡001の東側に位置するが、調査区壁際にあって一部を調査したのみである。確認した範囲では円形プランで、径110cm、深さ18cmである。上器小片が約10点出土した。

##### 土坑009出土遺物 Fig.17

30は古式土器で、長頸壺の肩部片であろう。内面には指痕が残るが、外面は器面が剥落して調整が不明である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良で内面に炭素が吸着する。

##### 土坑011 Fig.15, PL. 4

壁穴住居跡001と002に挟まれた狭い空間に位置する。平面プランはやや歪な長方形で、長径71cm、短径55cmを測り、断面形は逆台形状を呈し深さ42cmである。出土上器は、図示したものを含めて弥生土器が多いが全てローリングを受けており、他に上部器片があることからみて古墳時代前期の遺構と思われる。

##### 土坑011出土遺物 Fig.17

31は弥生時代中期の壺の口縁部小片である。逆「L」字形に屈曲し、屈曲部内面がやや突出する。ローリングを受けているが横ナナフリ調整か。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好である。32は弥生時代後期の高壺の口縁部片である。外反して開き、端部を丸くおさめる。ローリングのため調整は不明。胎土に砂粒を少量含むが精良で、焼成は不良である。

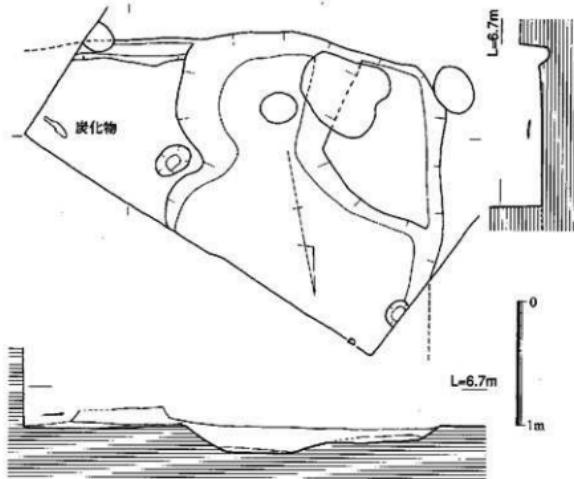


Fig.14 穹穴住居跡017実測図 (1/40)

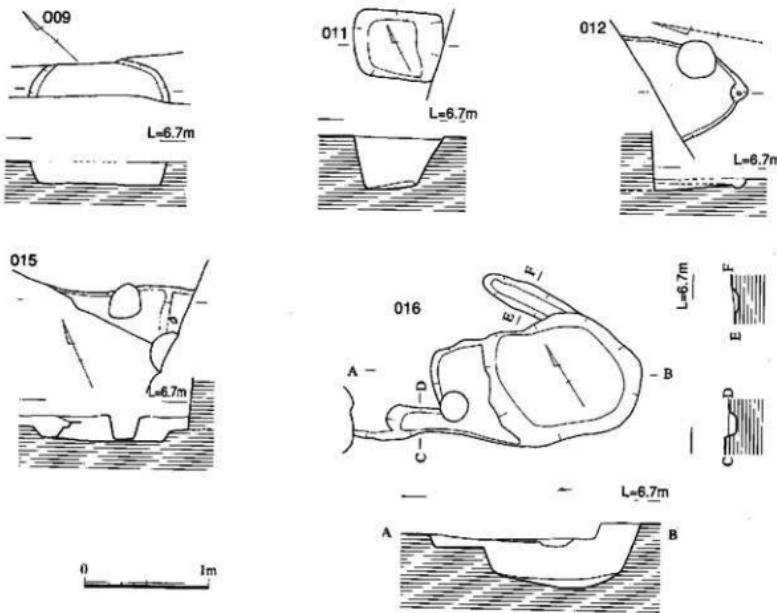


Fig.15 土坑009・011・012・015・016実測図 (1/40)

### **土坑O12 Fig.15, PL. 4**

竪穴住居跡003の西側に位置し、調査区外に伸びる。現状で不整な楕円形プランを呈するが、規模は不明である。深さが10cmに満たず、極めて浅い。土器器の断片等、少量の土器が出土したが図示できるものはない。

### **土坑O15 Fig.15**

竪穴住居跡003を切り、同001に切られる。また調査区外に伸びており、ほんの一部を調査したにすぎない。調査した限りでは深さ10cmの直線的な段落ちにも見え、竪穴住居跡の一部と考えることも不可能ではない。遺物は上器細片が5点出土したのみで、時期は不明である。

### **土坑O16 Fig.15, PL. 4**

竪穴住居跡001に大半を切られる土坑である。楕円形プランの土坑に短い溝状の窪みが二つ取り付く。土坑は西側に浅い段差を持ち、長径170cm、短径100cm、深さ53cm。溝は「ハ」字形に土坑に取り付き、幅20cm前後、深さ5cm前後を測る。出土遺物の大半は弥生土器で占められる。

### **土坑O16出土遺物 Fig.17, PL. 6**

33~35は弥生時代後期の器台で、いずれも粗雑なつくりである。33は内面にシボリ痕があり、口縁部付近はヘラ及びナデ調整、底部付近は指頭及びナデ調整である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。完品だが、下半部は風化により艶い。器高15.0cm。34と35は同一個体の可能性がある。34は口縁部片で、内面にシボリ痕、口縁部外側に指頭痕があり、ナデ調整する。胎土に砂粒を含み、焼成良好。35は底部片で、内面のシボリ痕は器面剥落のため不明、内面下半に削り気味のヘラナデを施し、端部は横ナデする。胎土に砂粒を含み、焼成は良好だが、風化のため艶い。36は砾石である。一側面のみを使用しており、作業面は磨滅して滑らかとなっている。

### **(3) 挖立柱建物**

掘立柱建物と題したが、柱穴が3つないし4つ並ぶだけのものである。狭い調査区では掘立柱建物の復原は困難であり、一案として報告する。

### **掘立柱建物O19 Fig.16**

規模と覆土が近似する柱穴がほぼ等間隔に3つ並ぶ。北側調査区外に展開する建物と考えができる。主軸方位は磁北から72度東に偏る。柱穴掘り方は円形プランで、径24~31cm、深さ25~39cmである。柱痕跡は認められない。柱間は西から順に206cm、181cmである。3つの柱穴からは口ハゲの白磁小片の他、七器小片が少數出土した。中世の遺構である。

### **掘立柱建物O19出土遺物 Fig.17**

37は柱穴102から出土した口ハゲの白磁である。胎土は白色で密、釉は緑味のある透明釉で、口唇部から内面にかけて釉剥離する。小片のため法量は不明である。

### **掘立柱建物O20 Fig.16**

深さは異なるものの、径と覆土が近似する柱穴がほぼ等間隔に4つ並ぶ。やはり北側に展開する建物とみることができよう。主軸方位は磁北から52度東偏する。柱穴掘り方は円ないし楕円形プランで、径25~39cm、深さ17~55cmである。柱痕跡は確認できない。柱間は西から順に165cm、152cm、170cmである。柱穴からは須恵器片2点の他、土器小片少量、鉄滓1点が出土したが、図示できるも

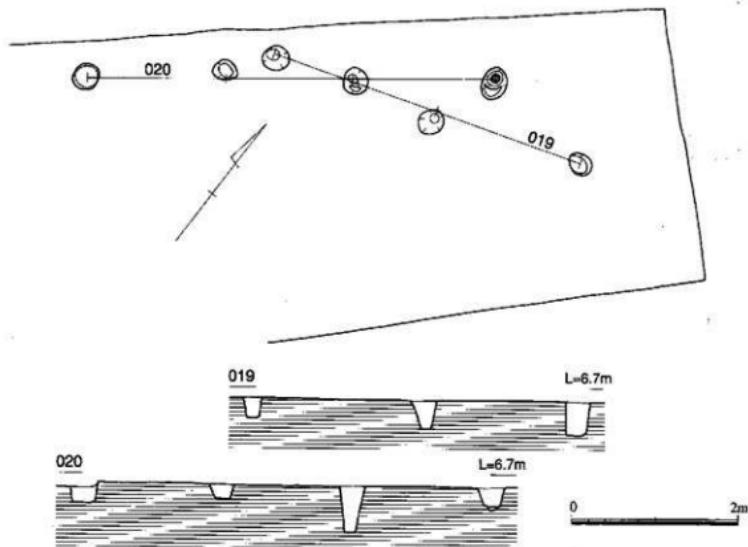


Fig.16 掘立柱建物019・020実測図 (1/60)

のはない。須恵器は古代の坏類であるが、覆土等の状況から中世の遺構である可能性が強い。

#### (4) その他の出土遺物 Fig.17

38はピット104から出土した須恵器坏で、外底の外寄りに高台を貼り付ける。ロクロ成形で、内底にナデ調整を加える。胎土は微砂粒を少量含むが精良で、焼成は良好である。39は土師器坏で、ピット146から出土した。高めの貼付高台で、器表面は全て剥落しており、ロク11日が少し残る。胎土は微砂粒を少量含むが精良で、焼成は良好である。

## 4. 小結

第76次調査の検出遺構のうち、時期が特定できるものを古い順に区分けすると以下のようになる。

( )は時期が不確実なものである。

弥生時代中期： (竪穴住居跡017)

弥生時代中期末～後期初頭： (竪穴住居跡003)

弥生時代後期： 竪穴住居跡002、(上坑016)

古墳時代前期： 竪穴住居跡001、(土坑009・011)

中世（14世紀頃）： 掘立柱建物019、(掘立柱建物020)

近世（詳細時期不明）： 段落ち010 (烟か)

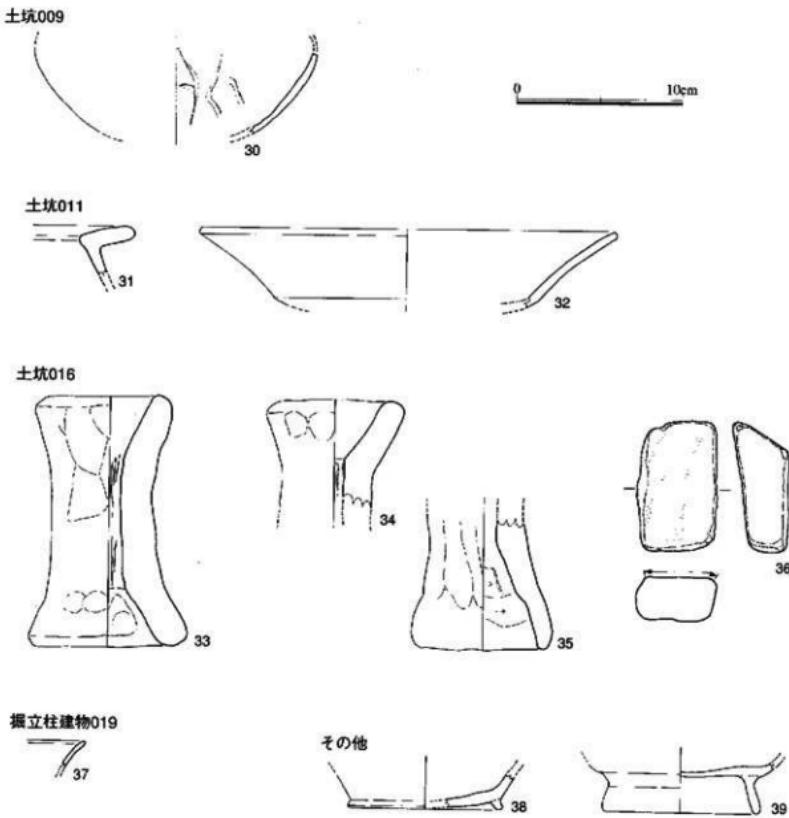


Fig.17 土坑・掘立柱建物等出土遺物実測図 (1/3)

特筆すべき出土遺物としては、弥生時代後期末の堅穴住居跡002から出土した半島系軟質土器、古墳時代前期初頭の堅穴住居跡001から出土した「ノミ」状鉄製品がある。当該期の半島系上器は、早良区西新町遺跡など早良平野で調査例が多いが、福岡平野でも博多・雀居・比恵遺跡群などで弥生時代後期～古墳時代前期の軟質・瓦質・陶質上器等が散見され、今回はそれに一例を加えたと言えよう。一方、「ノミ」状鉄製品は那珂・比恵遺跡群では初めての発見であるが、近隣では春日市赤井手遺跡6号土坑で7本が一括埋納された状態で出土したほか、大刀洗町本郷野間遺跡では弥生時代後期の堅穴住居跡から出土しており、本例と出土状況が類似する。これらは「ノミ」としての用途よりも、板状鉄製品等と同様、鉄素材として大陸ないし韓半島から輸入されたものと考えられ、事実韓国金海人成洞古墳群第29号墳等に類例があるが、その詳細については科学分析を待って検討したい。

### 第三章 第77次調査の記録

## 1. 第77次調査地点の位置と周辺調査例

第77次調査地点は比恵・那珂丘陵の北東部に位置し、調査所見から低地に位置するものと考えられる。周辺には、北西に第33・43次、西に第7・13・27次、南に第2・6・16・35・40・44・48・58次など多数の既調査地点がある。このうち第77次調査で検出した遺構の所属時期である弥生時代中期後葉～古墳時代に限って見ると、上記のいずれの調査地点においても堅穴住居跡・掘立柱建物・井戸・土坑・柱穴などの遺構が一般的に認められ、第40・42次調査では青銅器生産を示す遺物が出土している。第35・40・58次調査では3地点にまたがる弥生時代中～後期の溝がみられ、大きく南側へ伸びる溝である可能性が指摘されている。墓域は第6・17次調査地点で復元された墳丘墓の周辺に引き続き展開している。細かく見ると時期的な盛衰はあるものの、一帯に工房を伴う居住地域が広く継続的に展開していた状況を示しており、弥生時代中期後葉～後期の比恵遺跡群の中心的地域のひとつと考えられる。一方、古墳時代の遺構としては、前期までは集落が一部残るが、各調査地点で遺構・遺物ともに衰退する。そして第7・13次調査で確認された欄列を伴う大型掘立柱建物が古墳時代のある時期に出現し、一帯が小規模な集落を伴う官衙域へと推移したものと考えられる。

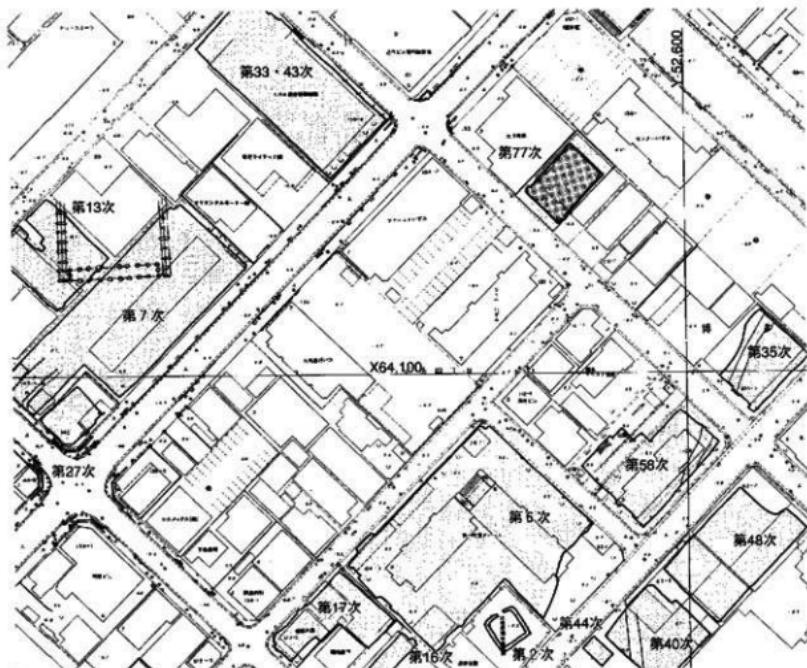


Fig.18 第77次調査地点の位置 (1/1,500)

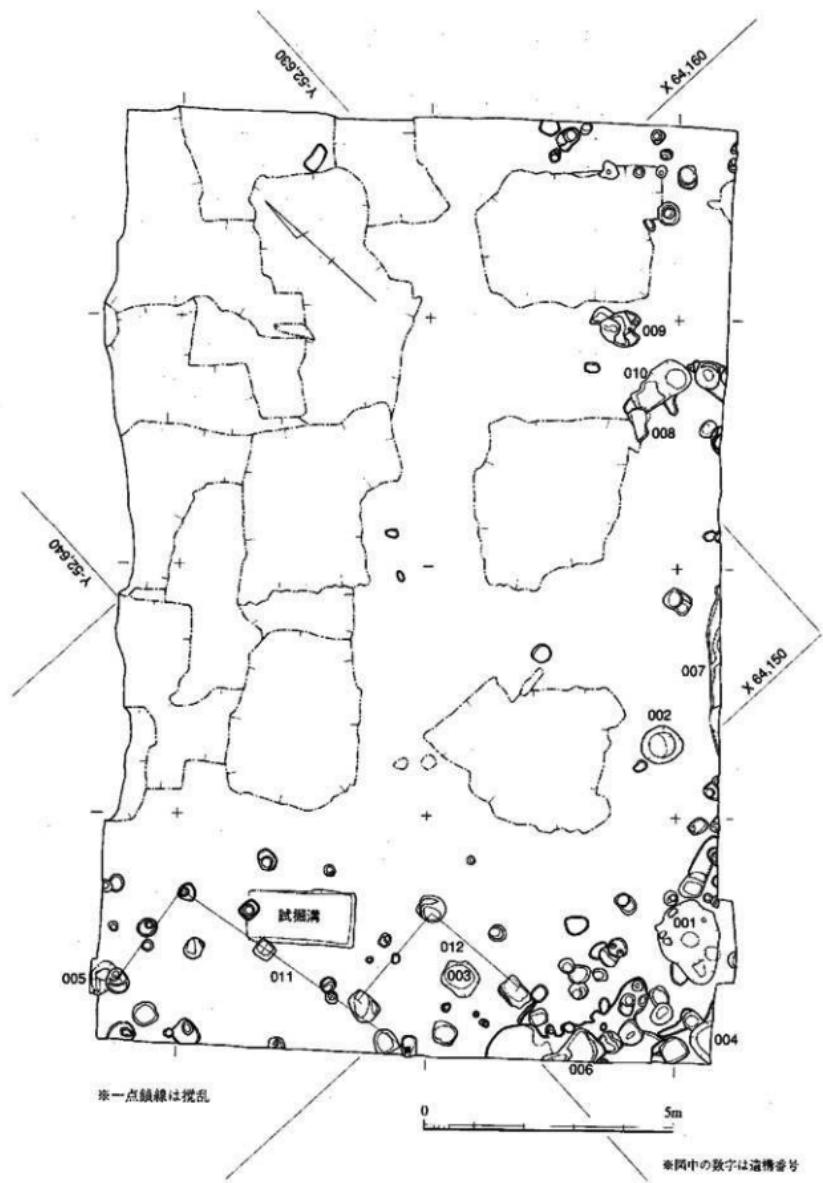


Fig.19 第77次調査遺構配置図 (1/100)

## 2. 第77次調査の概要

調査前は商業ビルがあり、この基礎により遺構面が大きく破壊されている。海拔標高は地表面が約6m、遺構面が約5mで、4.4m付近に現在の地下水位レベルがある。遺構検出面は鳥栖ロームの下部層に相当し、検出した遺構の残り具合からみて1m弱の削平を受けたものと考えられる。調査に際し、排土を場内処理するためまず南西側2/3の範囲を調査し、その後排土を移動して残りの調査を実施した。表土は大半が造成土で包含層等は存在しないが、遺構面直上には水田耕作土が乗っており、かつて水田であったことが知られる。検出遺構は弥生時代中期～古墳時代後期の井戸1、土坑4、柱穴などのピット約70である。これらの遺構は調査区の南から西の壁際に集中しており、中央から北側には遺構が全く見られない。削平されていることを勘案しても、この部分にはもともと遺構が存在していなかった可能性がある。このため全体的にみると遺構の密度は極めて薄いと言えよう。遺物はコンテナケース10箱分が出上り、このうち弥生時代中～後期の土器がその大半を占める。しかし、これらに混じって古墳時代初頭の古式土師器や6世紀頃の赤焼けの須恵器などが少数出土しており、遺構の大半は古墳時代以降のものと考えられる。流入した弥生土器が多量に出土したことから、削平前には厚い包含層が存在したと考えられ、当地点が包含層の形成されやすい低地にあたっていたことを示している。

調査区は北東～南西に長い区画をしており、遺構実測の基準線は調査区の形状に合わせて任意に設定し、後『博多区内比恵遺跡基準点測量委託 測量成果簿（平成5年3月）』の成果を利用して国土座標（第II系）上に位置づけた。標高もこれによる。

## 3. 検出遺構と出土遺物

### (1) 井戸

井戸001 Fig.20、PL.9

調査区南隅付近に位置する素掘りの井戸である。一部が調査区壁にかかるため拡張して調査した。平面プランは南に尖る楕円形を呈し、長径168cm、短径125cmを測る。断面形は逆円錐形を呈し、小さな楕円形の底面を造る。底面は径29～34cmで北側にやや深く、検出面から126cmを測る。覆土は黒色粘質土と地山上の混合土で、遺構が狭く深いため上層断面図は取れなかった。基盤土の十層は①淡黄褐色粘質土（鳥栖ローム下部層）、②灰白色粘質土（八女粘土層）である。現在の地下水位は遺構の中位、標高4.4mの位置にあり、壁面に抉れが認められる部分と一致する。

井戸001出土遺物 Fig.21～22、PL.12

1～35は弥生土器である。1～11は口縁が逆「L」字形に屈曲する弥生時代中期の臺で、いずれも小片のため口径を復原できるものはない。ローリングにより器面が剥がれ落ちたものが多く、調整手法が不明なものが多いが、観察できるものでは外面刷毛目、内面ナデ、口縁部横ナデ調整である。胎土には砂粒を含むほか、2、3、8は雲母粒を含む。焼成は3、5、9がやや不良で、他は良好である。5は口縁直下に断面三角形の突帯を貼り付ける。12～16は「く」字形に口縁が屈曲して開

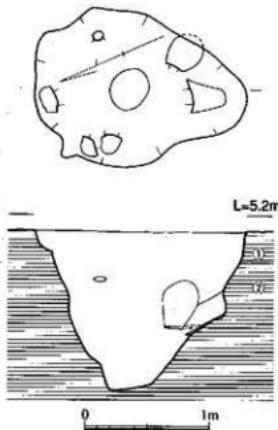


Fig.20 井戸001実測図 (1/40)

く壺で、屈曲部内面に稜線がある。大半は器面が剥落しており、調整は不明である。**16**は屈曲部外間に断面三角形の突帯を貼り付け、外面刷毛目、内面ナデ、突帯から口縁を横ナデ調整する。胎土に砂粒を含むほか、**16**はカクセン石を含む。焼成は**12**、**15**がやや不良、**13**、**16**は不良。**17**・**18**は弥生時代中期の高坏の口縁部である。ローリングのため調整は明らかでないが、**18**は内外面に横ナデの痕跡を残す。胎土に砂粒を含み、焼成は**18**のみ不良である。**19**・**20**は鋤先状の口縁を持つ壺である。**19**はローリングのため調整不明。**20**は横ナデ調整で、口唇部に小さく刻目を入れる。ともに胎土は精良で、焼成は不良。**21**は広口壺の小片で、内外面に丹塗り磨研を施す。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。**22**は口縁が内屈する弥生時代後期の壺で、屈曲部外間に稜を持つ。胎土に砂粒を含み、焼成は不良。**23**も広口壺で、胴部に断面三角形の突帯を2条貼付する。外面は突帯と頸部を横ナデ、他をナデ調整し、内面は頸部に指頭痕があるが器面が剥落して調整不明である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良。**24**は小壺で、胴部に断面三角形突帯を1条回す。調整手法は**23**と同じで、胎土に砂粒と雲母粒を含み、焼成は不良。**25**は高坏または脚付鉢の底部片で、器面が剥落して調整は不明。胎土に砂粒と雲母粒を含み、焼成はやや不良。**26**～**31**は壺の底部片である。いずれも平底で、ローリングのため調整は明らかでない。胎土には多量の砂粒を含み、**29**のみ雲母粒が加わる。全て焼成はやや不良。**32**～**35**は壺の底部片である。ローリングのため調整手法がはっきりしないが、**33**、**34**は内面ヘラナデ、**35**は内面刷毛目で外面ナデ調整である。胎土は**32**が雲母粒を含み精良、**33**と**35**は精良、**34**は砂粒を含む。焼成は**33**のみ不良で他は良好。

**36**は砥石であろう。表面の一部が剥離したものの、滑らかな面を有する。片岩系の石材を使用する。**37**～**44**は古墳時代前期の古式土師器である。**37**～**40**は甕の口縁部小片で、**37**～**39**は内湾氣味に、**40**は外反して開く。いずれも器面が剥げ落ちて調整不明である。**37**は口唇部を上方につまみ上げるもので、胎土に微砂粒を多量に含み、焼成は不良である。**38**は胎土に多量の微砂粒と僅かなカクセン石を含み、焼成は良好。**39**は口唇部を内側へつまみ出すもので、胎土に微砂粒と雲母粒を含み、焼成は不良。**41**は脚付鉢の一部で、器面は完全に剥落している。胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良。**42**は二重口縁壺で、口唇部を欠く。器面が剥落して明瞭でないが、全体を横ナデ、一部をナデ調整するようである。胎土は細砂粒が多く、カクセン石を少し含む。焼成は良好。口径19cm程度となる。**43**は甕の底部片である。丸底だが、僅かに平底の痕跡を留める。外面ナデ調整、内面は器面が剥落するが指頭痕のみ認められる。胎土に微砂粒を多く含み、焼成は良好である。外面全体に煤が付着する。**44**は甕である。頸部は丸く屈曲し、口縁は直線的に開き、口唇内面に沈線を1条巡らす。胴部最大径はやや上位にあり倒卵形を呈するが、底部は欠く。調整手法は、外面が右下がりの密なタタキで、1cmあたり6条を数えるが、1/2に減らして図示した。また、タタキが重なり合うが、単位のみを示すに留めた。タタキの後、底部に斜位の粗い刷毛目、口縁部に横位の刷毛目を加え、口縁を横ナデする。内面は、下半を斜め上にヘラ削りの後、上半を横位にヘラ削り、頸部はナデで指頭痕を消し、最後に口縁を横ナデする。外面肩部に「！」とヘラで刻む。淡い黄灰色を呈し、胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成は不良である。外面は口縁部にタール状に煤が付着するほか、肩部以下に煤、中位以下に炭化物が付着し、底部は加熱により亦変色する。内底にも煤が付着する。庄内甕を真似た在来系土器である。全体の約1/3が残る破片で、井戸の下層から出土した。

量的には弥生時代中～後期の土器が多数を占めるが、遺構の時期は古墳時代初頭に置けよう。

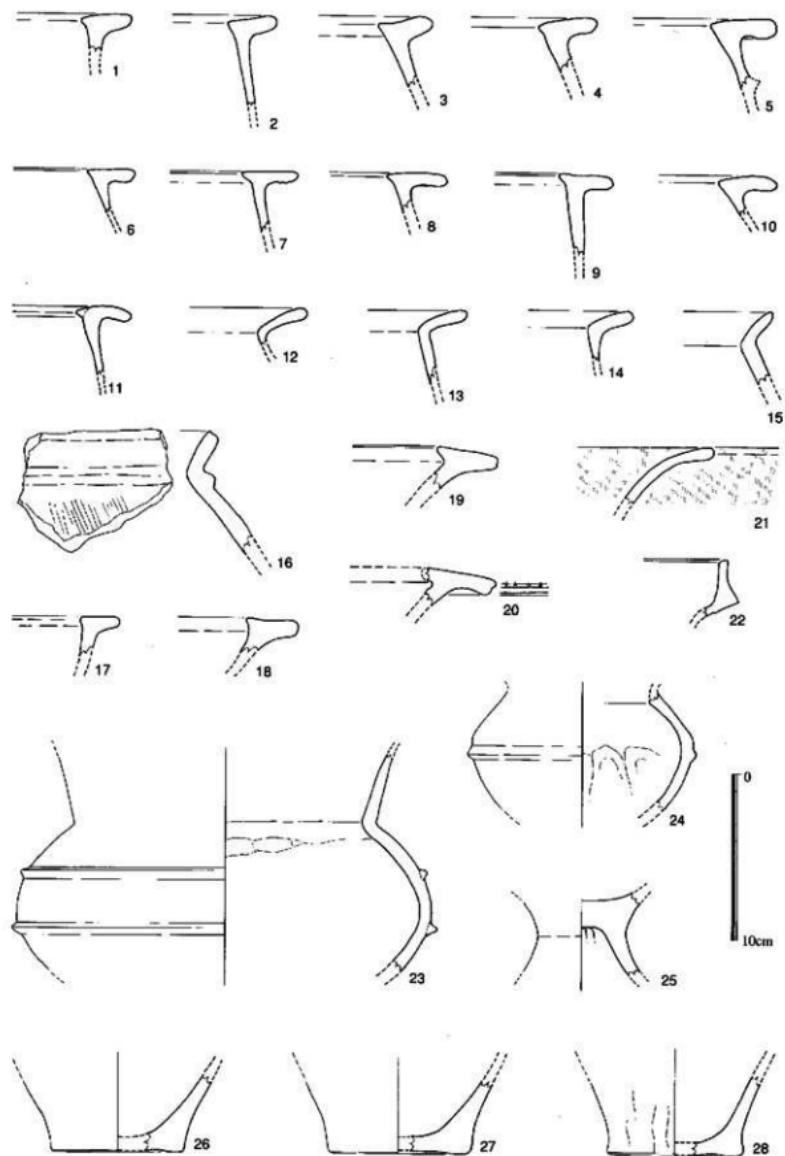


Fig.21 井戸001出土遺物実測図・I (1/3)

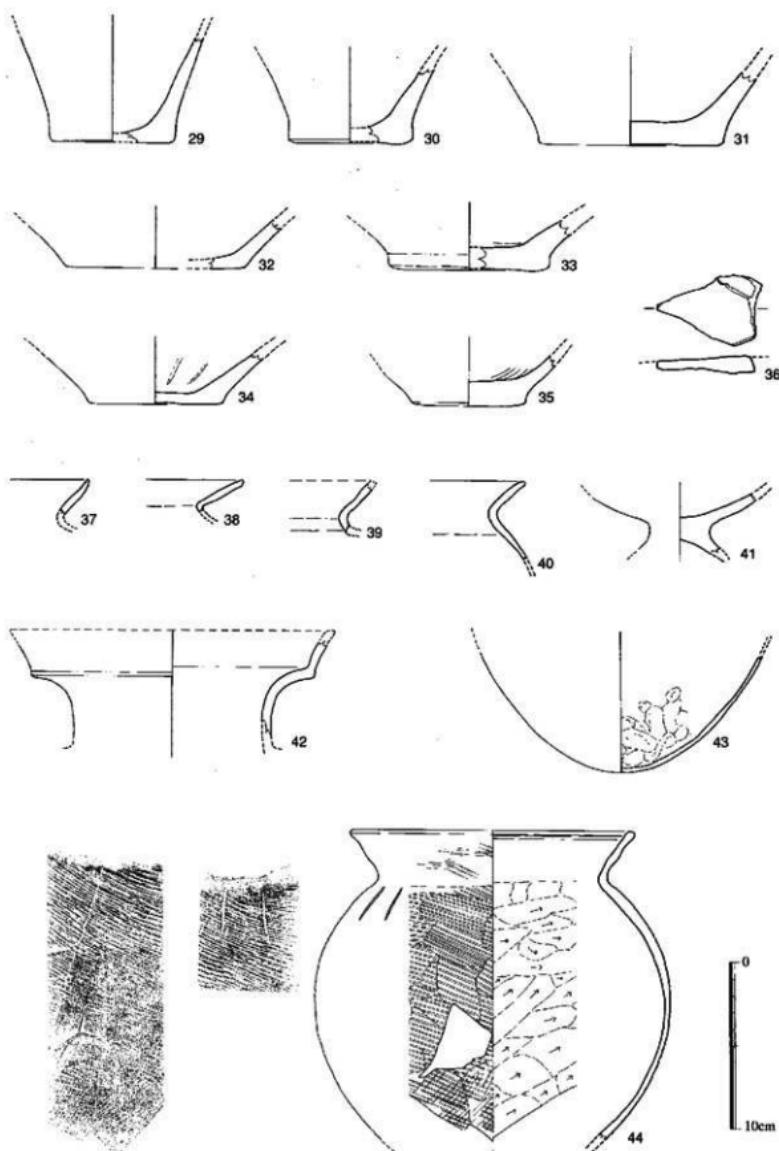


Fig.22 井戸001出土遺物実測図・II (1/3)

## (2) 土坑

### 土坑〇〇2 Fig.23, PL.10

井戸001の北東約3mに位置する。平面プランは梢円形で、長径84cm、短径74cmを測る。断面形は逆台形状を呈するが、底面は北西に深く、検出面から最大52cmである。覆土は①黒色粘質土（地山ブロックを含む）、②深黒色粘質土であり、地山土は③淡黄褐色粘質土（鳥栖ローム上部）、④淡黄褐色粘質土（鳥栖ローム下部）である。出土遺物は少なく、その9割方は弥生土器で全てローリングを受けている。

### 土坑〇〇2出土遺物 Fig.24

45~52は弥生土器である。45・46は「く」字形に口縁が屈曲して開く壺で、45は屈曲部内面に稜が多く、46は屈曲部内面に稜がある。いずれもローリングのため調整は不明瞭だが、外面に横ナデの痕跡を留める。胎土に砂粒を多量に含むほか、46には微量の雲母粒が混じる。ともに焼成は良好。47は口縁が逆「し」字形に屈曲して開く壺で、調整は不明。胎土に小砂粒を含み、焼成は良好。48は高壺で口縁が鋤先状を呈する。内面に部分的に丹塗りの痕跡を留めるが、他は器面が剥げ落ちている。胎土は精良で雲母粒を多量に含み、焼成はやや不良である。49~51は壺の底部片である。49はやや上げ底気味で、調整は不明。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良。50も若干上げ底気味で、外面は縱位の刷毛目調整、内面は丁寧なナデ調整である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良である。51は内面ナデ調整の他は器面が剥落して調整不明。胎土に多量の砂粒と少量の雲母粒を含み、焼成は良好である。52は壺の底部片で調整は不明。胎土に砂粒を少し含むが精良で、焼成はやや不良。53は土師器の小形壺で、偏球形の体部に直口縁が付く。頸部内面には粘土帶の継ぎ目が残る。器面が剥落しているが、内面はヘラ削りか。胎土に微砂粒を含むが精良で、焼成は良好である。

出土遺物の大半は弥生土器で占められるが、53の小形壺により古墳時代前期の遺構と考えらう。

### 土坑〇〇3 Fig.23

土坑002の西約6mに位置する。平面プランは不整な梢円形で、長径78cm、短径62cmを測る。円筒形状に掘り込み、開口部は少し開く。底面は平坦で深さは52cmである。覆土は①黒褐色粘質土（暗黄褐色粘質土ブロックを含む）、②黒色粘質土（同前）、③黒色粘質土+地山土であり、地山土は④淡黄褐色粘質土（鳥栖ローム下部）である。出土遺物は少なく、図示した遺物を含め、口縁部など特徴的な土器は弥生土器で占められるが、いずれも著しくローリングを受けている。

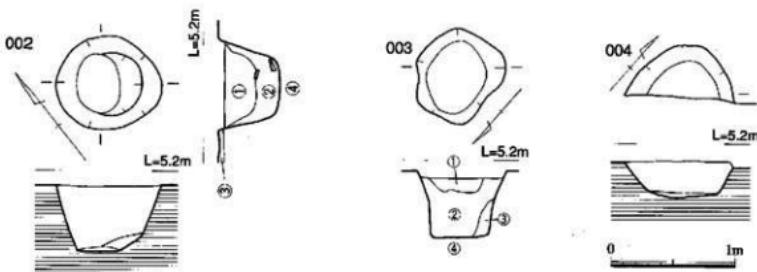


Fig.23 土坑002・003・004実測図 (1/40)

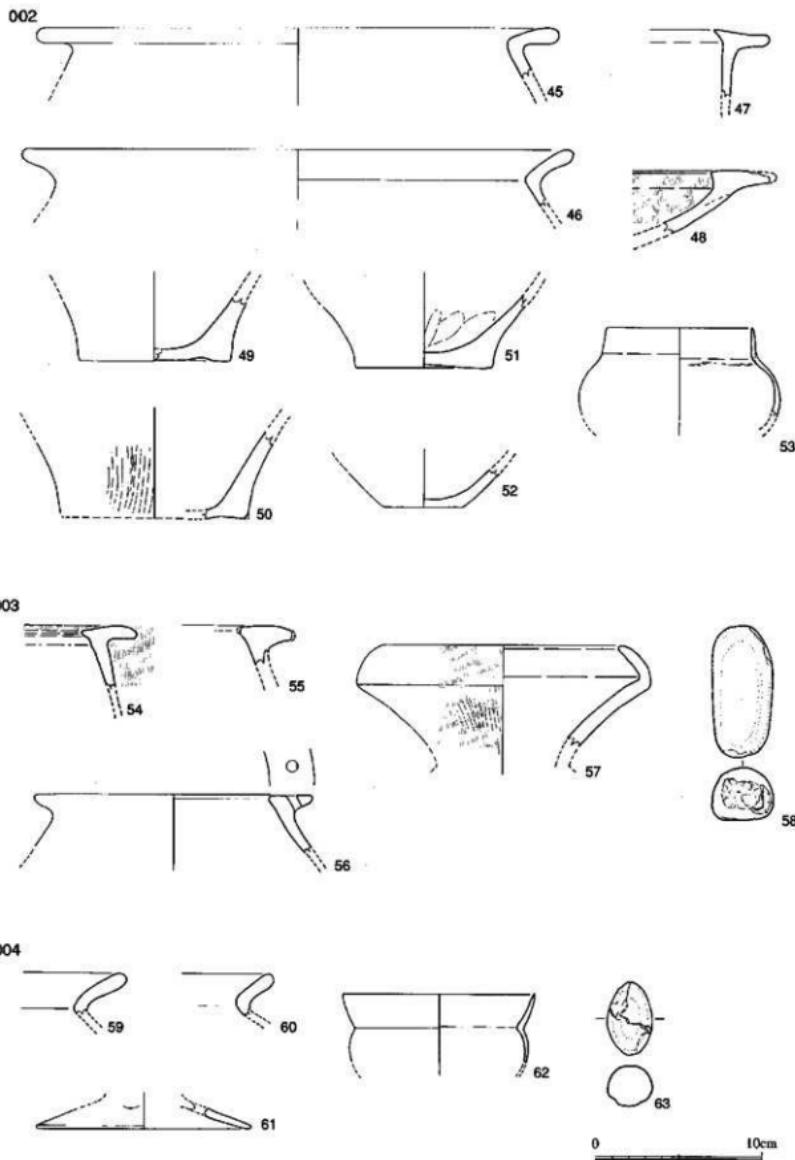


Fig.24 土坑002・003・004出土遺物実測図 (1/3)

### 土坑〇〇3出土遺物 Fig.24、PL.12

54~57は弥生土器である。54・55は口縁が逆「L」字形に屈曲する壺で、口縁内面が少し突出する。54は腹部内面をナデ調整、口縁内外を横ナデ調整し、口縁上面と腹部外面に丹塗りを施す。胎土に微砂粒と雲母粒を少量含むが精良で、焼成は良好である。55は器面剥落のため調整不明で、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良。56は無頸壺で、口縁が錫先状に強く屈曲する。焼成前に口唇部に上方から穿孔している。器面剥落のため調整は不明で、胎土に多量の砂粒と雲母粒を含み、焼成はやや不良である。57は袋状口縁壺で、口縁の屈曲が強く錫が入る。内外面ともローリングが著しいが、外面に継位の刷毛目、内面屈曲部に横ナデの痕跡を留めており、外面には丹塗りを施す。細かい砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

58は棒状の叩き石で、下縁にのみ敲打痕がある。石材は花崗岩か。

明らかに土師器と判別できるものはないが、他の遺構に照らして古墳時代の土坑と考えられる。

### 土坑〇〇4 Fig.23

調査区南端コーナー部でその一部を検出した。確認できた範囲で平面プランは円形をなしており、最大径は88cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦で深さ29cmである。覆土は黒色粘質土で、自然に埋没した状況であった。出土遺物は少なく、大半は弥生土器だが、古式土師器が少量含まれる。

### 土坑〇〇4出土遺物 Fig.24、PL.12

59・60は弥生土器の壺で、口縁が「く」字形に屈曲して開く。器面が剥落して調整は不明瞭だが横ナデであろう。ともに胎土に砂粒を多量に含み、焼成は59が良好、60はやや不良である。61・62は土師器である。61は高壺の脚部片で、ローリングのため調整は不明である。透孔は内外両方向から穿つ。胎土に微砂粒を少量含むが精良で、焼成はやや不良である。62は小形丸底で、腹部内面にヘラ削りの痕跡を僅かに留めるが、他は器面が剥げ落ちている。胎土に砂粒を僅かに含むが精良で、焼成はやや不良である。

63は上弾で、ほぼ完存している。ヘラ絞形し、胎土に砂粒とカクセン石を少量含むが精良で、焼成は不良である。長さ4.3cm。

出土した土師器より、古墳時代前期の遺構と考えられる。

### 土坑〇〇5 Fig.25、PL.10

調査区西コーナー付近に位置し、一部が調査区壁にかかったため、拡張して調査を行った。南東を後世のピットに切られるが、平面プランはほぼ円形と考えることができる。東西73cm、南北58cm、深さ50cmで、断面形はおおよそ逆台形状を呈し、底面は平坦である。底面の北側に寄せて小形の壺一個体を横置きしていた。木蓋等の有無は明らかではないが、内部には何らの遺物も含まれていなかった。また、壺の上層からは焼いた粘土塊が出土した。遺構面が強く削平されていることを考慮すると、かなり深く掘り下げて上器を埋め込んだものと思われる。

### 土坑〇〇5出土遺物 Fig.26、PL.12

64~68、70は弥生土器である。64は土坑底面に置かれていた壺で、完存する。口縁は「く」字形に屈曲して開くが後縁は入らない。

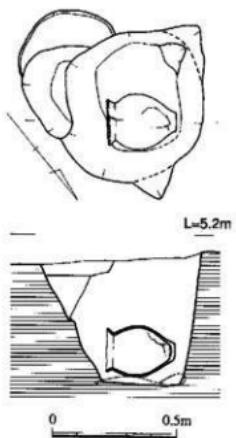


Fig.25 土坑〇〇5実測図(1/20)

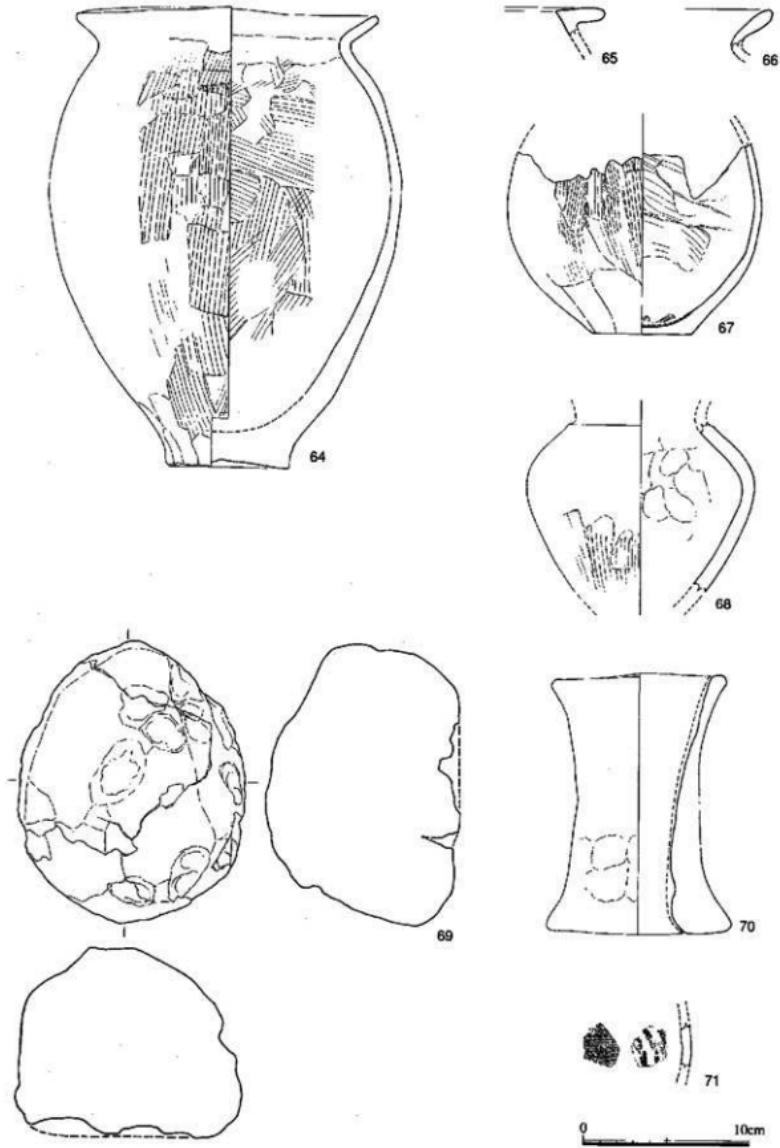


Fig.26 土坑005出土遺物実測図 (1/3)

胴部の最大径はやや上位にあり、21.0cmを測る。底部は厚めの平底で、外底中央には焼成後の浅い打ち欠きがある。内面の調整は底部と頸部がナデ、胴部はナデの後難に刷毛目調整しているが、下半部は板ナデに近い。外面の調整は縦位の刷毛目で、F縫はヘラ整形する。最後に口縫内外を横ナデ調整している。胎土に細砂粒と雲母粒を多量に含み、焼成は底部が特に不良である。器形が歪み、口径17.9~18.6cm、器高27.0~27.5cmを測る。65は逆「L」字形に屈曲する壺の口縫部片で、器面は剥げ落ちている。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。66は「く」字形に屈曲して聞く壺の口縫部小片で、器面は剥落している。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。67は壺で、口縫部を欠く。胴部は球形で、平底に作るが、全体的につくりが難である。内面は底部から刷毛目、ナデ、板ナデ状の粗い刷毛目の順に調整し、外面は難な刷毛目の後、下端をヘラナデ調整する。外底はナデ調整である。胎土は砂粒を少量含むが概ね精良で、焼成はやや不良である。二次加熱を受け、底部内外の器面が剥離するとともに、タール状のコゲが点々と付着する。胴部最大径15.1cm。68は小壺の胴部片である。やや肩の張る器形だが小片のため傾きは不正確である。頸部外面に浅い段を持つ。内面は指整形の後ナデ、外面は下半を粗い刷毛目の後、上半に丁寧なナデ、段以上に横ナデ調整を施す。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良で脆い。外面に黒斑がある。70は器台で、ほぼ完存する。器壁は底部に厚く、口縫部に薄い。器面は完全に剥落しており、外面下半に指整形の痕を留めるのみである。胎土に砂粒・斜長石、カクセン石を多量に含み、焼成はやや不良である。二次加熱を受け変色しており、外面にはまだらに黒斑がある。やや歪で、器高15.1~15.5cmを測る。69は土製品である。小児頭大の粘土塊を焼いたもので、底面は平坦面をなす。側面から頂部に指痕が多く残り、ヒビ割れが縦横に走っており、形状からヒトの脳を思わせる。胎土には細砂粒とカクセン石を僅かに含むが精良で、70の器台の胎土によく似ている。焼成は良好である。透過X線写真撮影を試みたが、内部には何ら含まれていないことが判明した。71は須恵器壺の小片で、内面に当て具痕、外面にカキ目が残る。隣接する後世ピット等から混入した遺物と考えられ、この須恵器1点を除けば、土坑005は弥生時代中期に位置付けられよう。

#### 土坑〇〇6 Fig.27

土坑003の南に1m離れた位置に検出した。調査区壁にかかり全容は不明であるが、長方形プランをなすものであろう。短径72cmで、深さは10cmと浅い。西側へ向かって段状に落ちている。遺物は全く出土していないが、土質が他の遺構と全く異なっており、かなり新しい時期に下る遺構と考えられる。削平後の水田耕作等に伴うものであるかもしれない。

#### 土坑〇〇7 Fig.27

調査区南東壁沿いに検出した土坑ないし溝の一部と考えられる遺構である。一部を調査したのみで、現況で長さ343cm、幅25cmを確認した。調査区壁に向かって落ちていき、最深部で10cmを測る。土質は他の古墳時代の遺構に近似している。土器小片が約10点出土したが、図示できるものはなく、時期は不明である。

#### 土坑〇〇8~〇10 Fig.27, PL.10

調査区東寄りに位置する土坑群である。一連のものと考え、まとめて報告する。土坑008は最も西側にあり、不整辺円形プランで長径68cm、短径24cm、深さ24cm、土坑009は最も北側に位置し、不整辺円形プランで長径82cm、短径73cm、深さ25cm、七坑010は前二者の間にあり、不整辺円形プランで長径

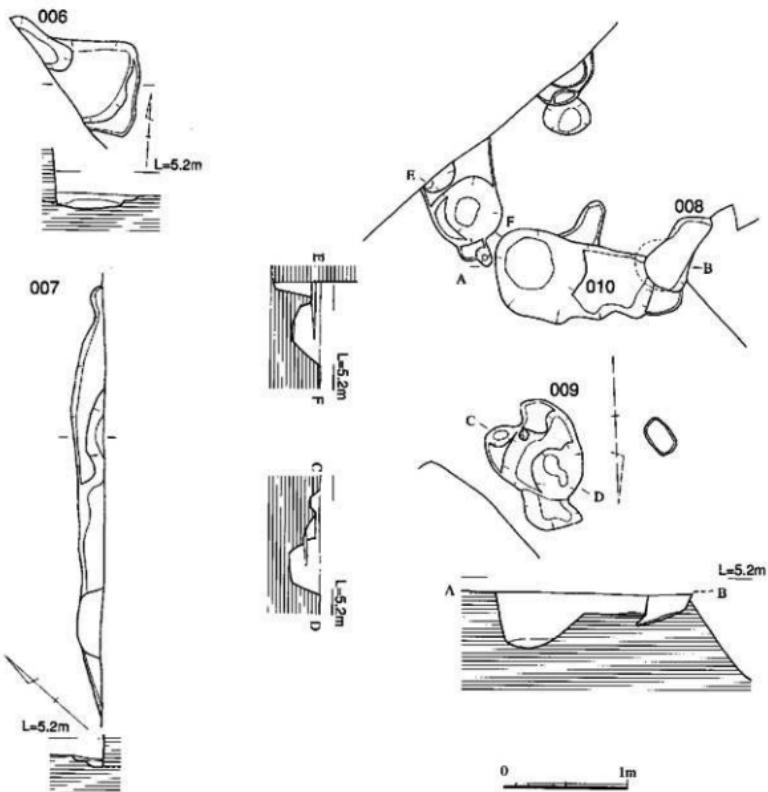


Fig.27 土坑006~010実測図 (1/40)

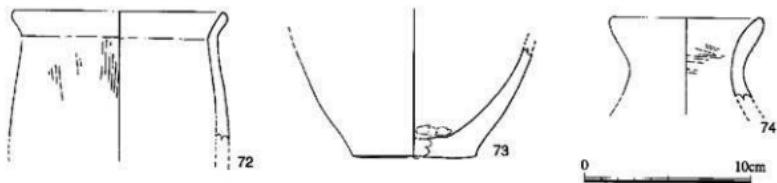


Fig.28 土坑009出土遺物実測図 (1/3)

152cm、短径70cm、深さ44cmである。ローリングを受けた弥生土器片が少数出土した。これらは配置と形状からみて倒木痕と考えられる。

#### 土坑009出土遺物 Fig.28

図示した遺物は全て弥生土器である。72は浅で、口縁が緩く屈曲して開き、端部は丸い。胴の張りは少ない。外面に縦位の刷毛目が僅かに認められるが、他は器面が剥落して不明である。胎土には砂

粒を多量に含み、焼成はやや不良である。73は小形の甕の底部である。外底が尖レンズ状に少し膨らみ安定が悪い。内底に指痕があるが、他は全てナデ調整である。胎土に細砂粒を多量に含み、焼成は不良で、外面には黒斑がある。74は器台の口縁部であろうか。器形が壺んでおり、図の傾きは正確ではない。内面に刷毛目が一部認められる他は器面が剥落している。胎土に細砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

### (3) 挖立柱建物

掘立柱建物は2棟を報告するが、いずれも調査区内には納まらない。他にも柱穴多数があるが大半が調査区壁際に位置しており、建物の復原は困難である。ここでは一案として報告しておく。

#### 掘立柱建物011 Fig.29, PL.11

調査区西隅に位置する。覆土が近似する柱穴がほぼ等間隔に並ぶ。調査区外へ伸びているが、3間

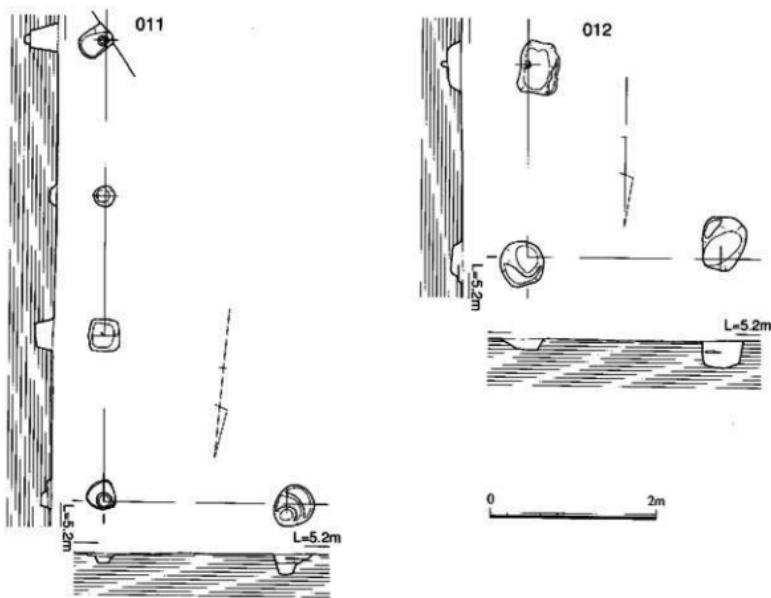


Fig.29 掘立柱建物011・012実測図 (1/60)

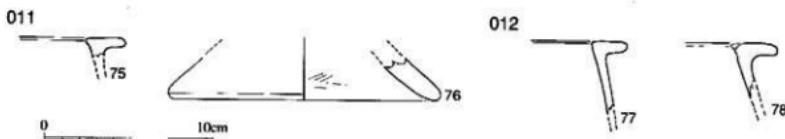


Fig.30 掘立柱建物柱穴出土遺物実測図 (1/3)

以上×1間以上の建物に復原できる。主軸方位は磁北から6度西を向く。南北全長は549cmで、柱間は北から順に197cm、166cm、186cmを測る。東西の柱間は218cmである。柱穴掘り方の平面プランは円形、楕円形、隅丸方形、隅丸長方形と多様で、規模は径25~50cm、深さ8~40cmの範囲内にある。いずれにも柱痕跡は認められない。これらの柱穴からは土器小片が少量出土した。その大半は弥生土器であるが、他に胸部内面に削りのある土器片が含まれており、古墳時代以降の建物と考えられる。土坑005に混入して出土した須恵器片がこの建物の柱穴に伴う可能性があり、古墳時代後期以降に下る場合もある。

#### 掘立柱建物O11出土遺物 Fig.30

図示しする遺物は弥生土器のみである。75は弥生土器の甕で、口縁が逆「L」字形に屈曲する。調整は不明で、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好である。76は脚もしくは器台の一部と思われる。内面に刷毛目が残るが、他は器面が剥落して調整が不明である。胎土に微砂粒と雲母粒を含み、焼成は良好である。

#### 掘立柱建物O12 Fig.29, PL.11

掘立柱建物011の南側に位置し、これと重複する。調査区外へ伸びているが、現況で1間×1間の建物と考えることが可能である。主軸方位を磁北にとり、南北長230cm、東西長233cmを測る。柱穴掘り方は円形ないし隅丸長方形プランで、径45~64cm、深さ13~33cmである。柱痕跡は確認できない。柱穴出土遺物は弥生土器小片のみであるが、やはり古墳時代以降に下る遺構であろう。

#### 掘立柱建物O12出土遺物 Fig.30

やはり図示し得る遺物は弥生土器のみである。77・78はともに甕で口縁が逆「L」字形に屈曲するものである。77はローリングのため調整は全く不明で、胎土は砂粒を少量含むものの精良で、焼成は良好である。78は屈曲部が若干内側へ突出し、胴部内面のナデ調整と口縁内面の横ナデ調整以外は器面がボロボロとなっており調整不明である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

#### (4) その他の出土遺物 Fig.31, PL.12

掘立柱建物としてまとまらない柱穴等から出土した遺物のうち、図化し得るものを探載した。

79~83は弥生土器である。79は甕で、口縁が逆「L」字形に屈曲する。著しくローリングを受けしており、調整は全く不明である。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好である。80も甕で口縁は「く」字形に屈曲して開く。器面は剥落している。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良である。81は弥生時代後期の甕で、口縁が外反しながら開き、端部は直取りされる。器面が全て剥げ落ちており、調整は不明。胎土に細砂粒を非常に多量に含み、焼成は極めて不良である。82は甕の底部片で、平底である。内面は雑なへラ整形で、外面は器面が剥落している。底部の偏った位置に焼成後の尖孔がある。胎土に細砂粒を少量含み、焼成はやや不良である。83は袋状口縁甕である。頸部上端に断面三角形の突帯一条がある。内外面とも器面が剥落しているが、外面には点々と丹塗りの痕跡が認められる。胎土に細砂粒を少量含み、焼成は不良である。84は赤焼けの須恵器で、甕の胴部片であろう。ローリングを受けているが、内面に当て具痕、外面に格子日タタキが残る。胎土には砂粒をほとんど含まず、破面には練られた素地土の単位が節理状に見て取れる。焼成は不良である。

85は凹石の破片である。偏平な砂岩の円盤を用い、表裏両平坦面に敲打により窓みをつくる。凹石ないし叩き石として使用した痕跡はない。

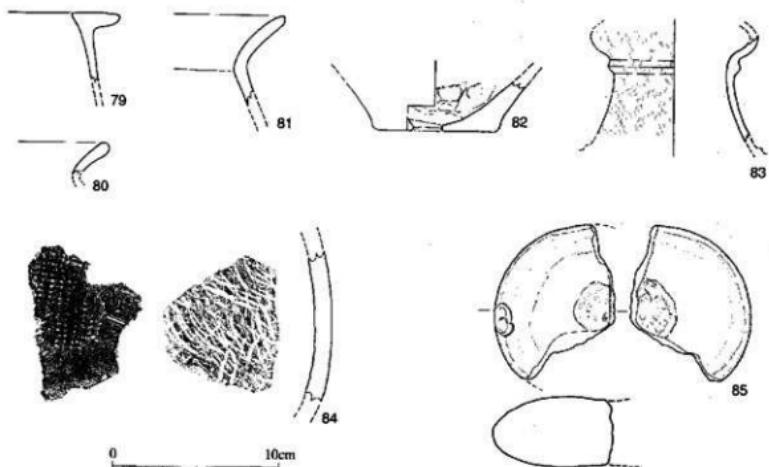


Fig.31 その他の出土遺物実測図 (1/3)

### 3. 小結

第77次調査で検出した遺構のうち、明確に時期を特定できるものは、弥生時代中期末の土坑005、古墳時代前期の井戸001、土坑002・004のみである。他の遺構は、出土遺物に弥生土器しかないものが多いが、井戸001をはじめとする古墳時代の遺構に多量の弥生土器が含まれていたことから考えて、ただちに弥生時代の遺構と断定することはできず、古墳時代後期までのものを含んでいると考える必要がある。一方、古墳時代以後の遺構に流入して出土した多量の弥生土器は、削平前に厚い遺物包含層がかつて存在したことを示しており、ここが包含層の形成されやすい、周囲よりも低い低地に含まれていたことを示している。そして、このような地形に制約され、ここは集落の縁辺部にあたっていたものと考えられる。検出した遺構が調査区の西壁～南壁に沿った部分にのみ展開しており、それ以外の範囲では全く認められることもこれを裏付けるものと言えよう。この想定があたっているとすれば、調査区の北西隅に検出した小形の甕と小兒頭大の粘土塊を埋納した弥生時代中期末の土坑005は、集落境界に対する弥生人の祭祀の一端を示すものと考えることもできる。

出土した遺物は弥生土器と土師器、赤焼けの須恵器に限られ、古代以降の遺物は皆無であった。周辺の調査事例や北恵遺跡群全体で見た場合も、古代以降は集落（郡衙を含む）が那珂遺跡群へシフトしていく状況が窺えるが、当調査地点もこのような全体的な流れに沿った遺構・遺物のありかたを示すものと言えよう。

## 第四章 おわりに

各調査地点で得られた成果については各章の小結で述べたので、ここでは第76次調査で検出した弥生時代後期末の堅穴住居跡002を取り上げたい。この住居跡は残りが悪いが、長方形プランを呈し両短辺側に長方形のベッド状造構を持つ2本柱の堅穴住居と考えられ、この時期に通有な形態である。床面中央には地床炉があり、これを挟んで2本の主柱穴が対峙し、主柱穴の間には幅約50cmの溝が掘られる。床面には貼床が施されているが、この溝は貼床上面で検出することができ、炉跡及び柱穴はこの溝を埋めた後に掘られている。この溝は何の目的を持っていたのであろうか。

同様の構造を持つ堅穴住居跡は、気付いた限りでは福岡市内では那珂遺跡群第13・18・49次、野多日A遺跡第4次の他、非戸B遺跡で最近調査例があり、市外では小郡市乙原天道町遺跡、筑紫野市以来尺遺跡、大刀洗町本郷野開遺跡などで確認されており、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡に稀に見られるようである。特徴としては、床面下に溝を「埋め殺し」していること、溝の埋上中に地中梁等を示す様な痕跡はないこと（那珂13次例では灰層と思われる粘土層を挟む）、溝を埋めた後から地床炉を掘り込むこと、かの位置が片方の柱側（長辺壁際の土坑に相対した場合右側）に少し偏ることなどが共通項として挙げられる。また、各々の出土遺物を仔細に検討した訳ではないが、鉄製品や鉄片類、あるいは砥石や叩石等を出土する住居、ないしはこれらを多量に保有する集落に多く見られるような印象があり、製鉄品の加工との関連性も考えられる。上記遺跡の各報告書中でこの溝の果たした役割について触れたものは少ないが、以来尺遺跡では湿度調整（湿気抜き）、あるいは棟持柱に対する祭祀や区画、などの解釈が示されており、前者であればそれは鉄製品の加工と関連してくるかもしれない。いずれにせよ、同一集落の同一時期の住居にこの構造を持つものと持たないものが併存することから、特異な住居であったものと考えられる。しかし、住居跡の一構造のみを取り上げて検討しても限界があり、住居跡の他の構造や出土遺物を含めて比較検討する必要がある。ここでは、類例の集成を含めて今後の課題としておく。

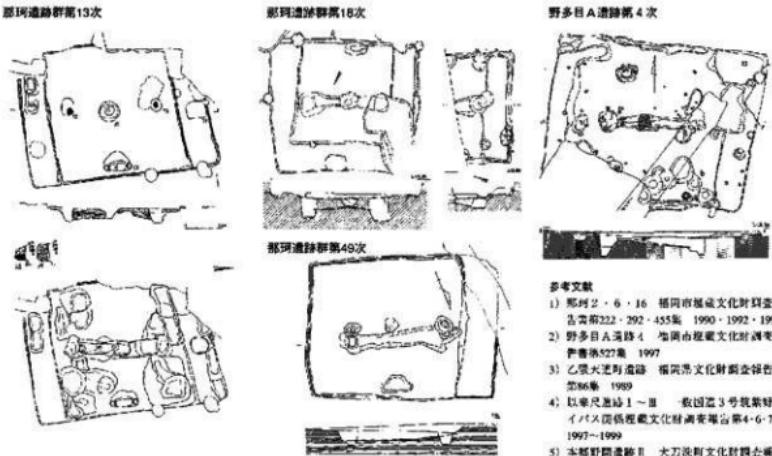


Fig.32 第76次調査堅穴住居跡002の類例 (1/100)

**PLATES**  
**(図 版)**





1 第76次調査区全景（北東から）



1. 穂穴住居跡001（南東から）



2. 穂穴住居跡001（南西から）



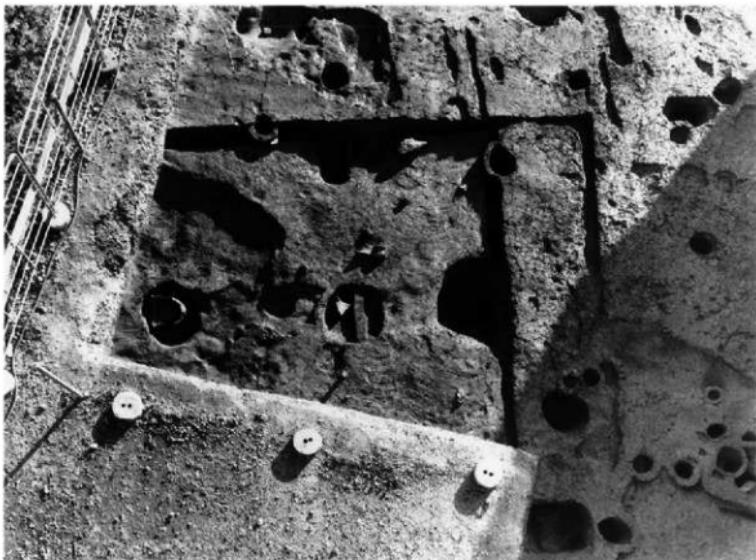
3. 鉄製品の出土状況（北東から）



4. 鉄製品の出土状況（西から）



5. 土器の出土状況（南東から）



1. 壁穴住居跡002（北東から）



2. 壁穴住居跡002（南西から）



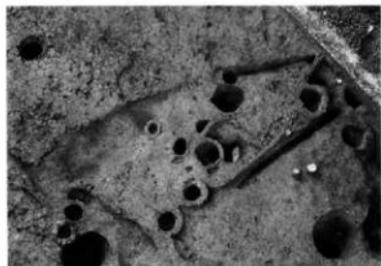
3. 壁穴住居跡002（北西から）



4. 主柱穴から出土した土器（北東から）



5. 遺物の出土状況（西から）



1. 竪穴住居跡003（東から）



2. 竪穴住居跡004（北東から）



3. 竪穴住居跡005（北東から）



4. 竪穴住居跡017（南西から）



5. 土坑011（北西から）



6. 土坑012（南東から）



7. 土坑016（北東から）



8. 土坑016（北西から）



1. 調査区西端部の段落ち（北から）



10



6



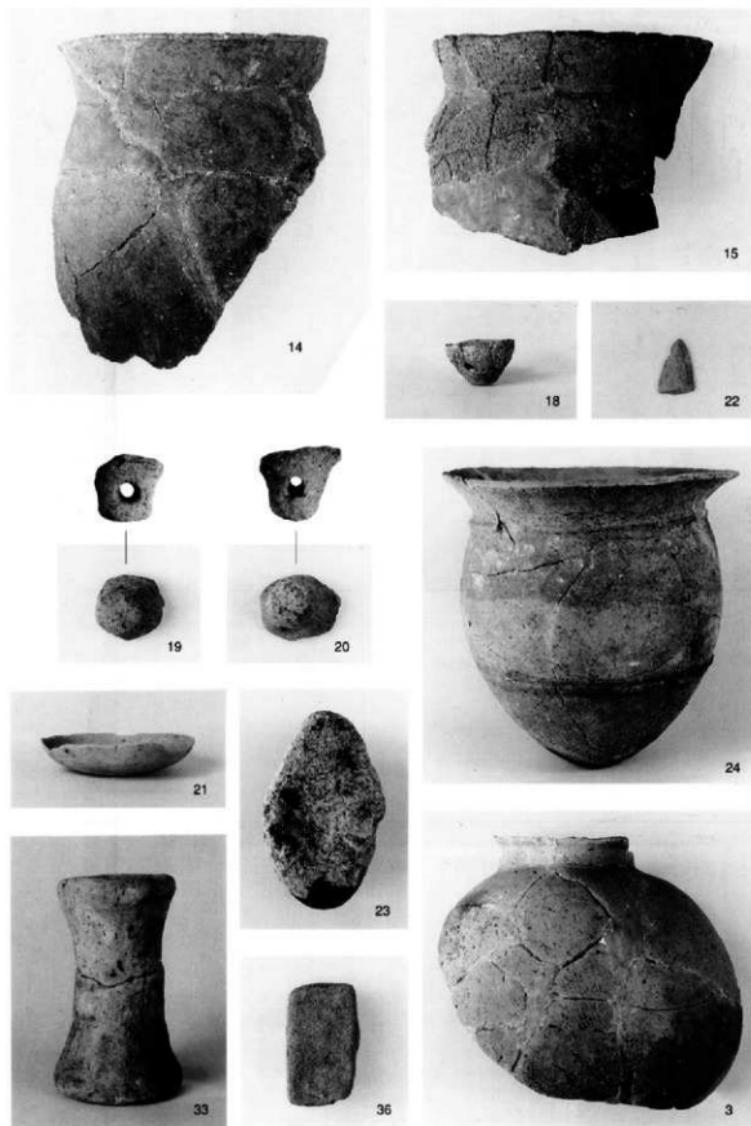
7



11

2. 第76次調査出土遺物・I (縮尺不同)

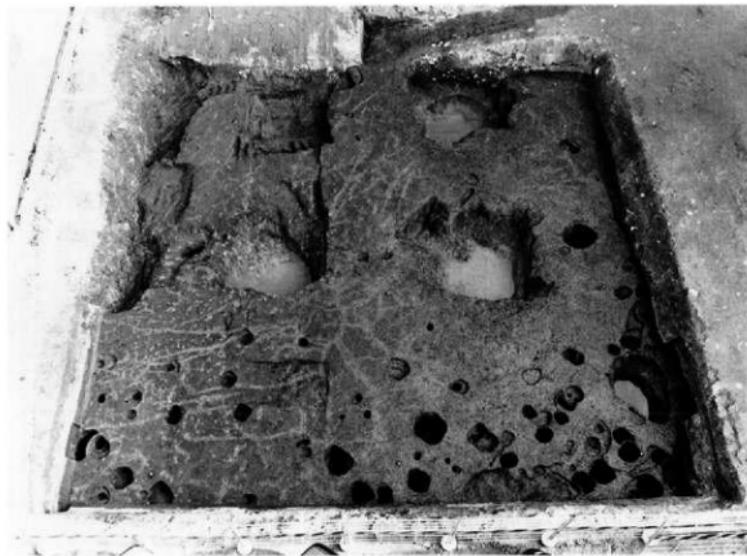
12



第76次調査出土遺物・Ⅱ（縮尺不同）



1. 第77次北東側調査区全景（南西から）



2. 第77次南西側調査区全景（南西から）



1. 第77次南西側調査区（北から）



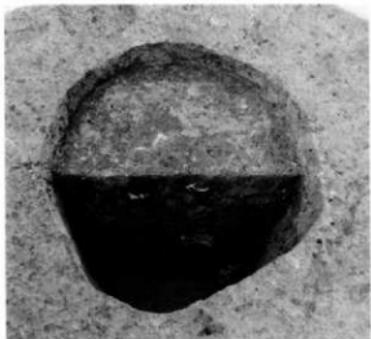
2. 第77次北東側調査区作業風景（東から）



1. 井戸001 (北西から)



2. 井戸001 (南西から)



1. 土坑002土層断面（南東から）



2. 土坑002完掘状況（南東から）



3. 土坑005土器出土状況（南西から）



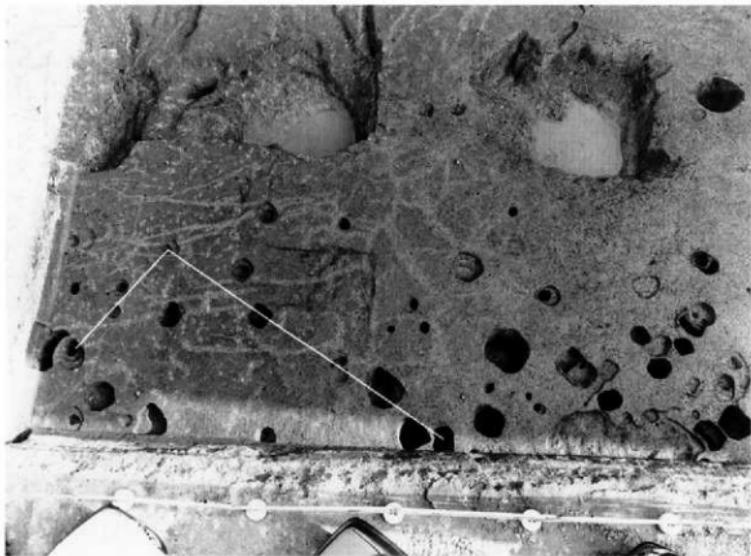
4. 土坑005土器出土状況（南東から）



5. 土坑008・010（南から）



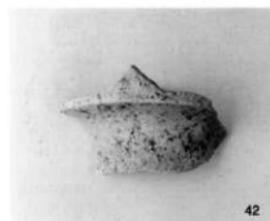
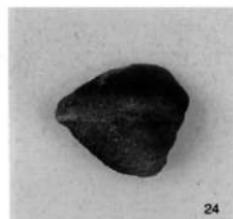
6. 土坑008・010（南西から）



1. 据立柱建物011（南西から）



2. 据立柱建物012（南西から）



第77次調查出土遺物（縮尺不同）

## 比 惠 32

—比恵遺跡群第76次調査・第77次調査報告—

福岡古埋蔵文化財調査報告書第771集

2003年3月31日発行

発 行 福岡市 教 育 委 員 会

福岡市中央区天神一丁目8番1号

(092) 711-4667

印 刷 (有)三陽印刷所

福岡市早良区昭代1丁目16-39

(092) 821-0118

